

言語學目次

言語學の定義、名稱、目的、及其の研究の方法……………一

言語學と他の諸學との關係……………四

一 比較宗敎學と言語學との關係……………一五

二 史學と言語學との關係……………一

三 人類學と言語學との關係……………一五

四 心理學と言語學との關係……………一七

五 論理學と言語學との關係……………一八

六 音韻學と教育學との關係……………一八

七 自解學の効用……………二一

八 言語を如何なるものか……………二二

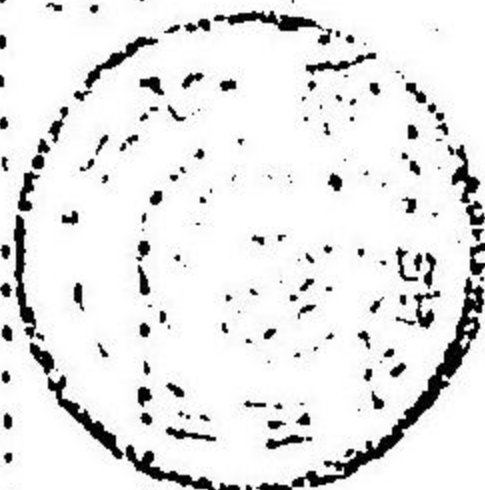
九 言語と思想との關係……………二六

一〇 言語の起源……………二九

一一 何故に言語は他動物になくして人類のみに限られたるか……………三〇

一二 人類言語の起源……………三三

一三 神傳説……………三三



言語學目次

る	自然説	三四
は	實驗説	三七
に	先天能力説	四〇
	言語を習得する有様	四二
	附外國語を學ぶ方法	四七
	言語が通用せられ播布せらるゝ理由	五一
	言語の性命	五三
	言語變化の種類	五七
	言語の外形變化の理由	六〇
	音韻の變化を論ず	六九
一	發音機官の構造	七〇
二	主なる音韻の發生する有様	七七
い	清音と濁音との區別	七九
る	母音子音半母音鼻音等のこと	八〇

言語學

文學士 藤岡勝二 講述

言語學の定義、名稱、目的及其研究の方法

言語學は一箇の科學にして言語が人間の特有物として何等の價値を有し人間の智力と言語とは如何なる關係を有するか人間が其思想を言語に表彰するに就て如何なる規則あるか抑も言語の起源は如何なるものにして其變遷し發達するに一定の順序といふべきものありや規則といふべきものありや一定の規則一定の順序ありとせば其變遷となすには一定の原因ありざるべからず其原因は果して如何なるものなりや等を研究するものなり、要之言語學は人類の思想を表彰するに必要なる口音の組立を以て成れる言語を科學的に研究するものなり

言語學が研究の主題とするところは人類の言語に在ることとは尤も注意を要する事にして若し之を誤解するときは所謂言語學の本領を識ること能はざるなり言語學といふ名稱は近時斯學の學界に公認せらるゝところなりと雖屢々人は英語の Philology といふ語に適用せんとす、これは英國に於ても又獨乙に於ても共に所

謂言語學といふもの、意味に解せず、古典若くは近代の文に於ても凡て文學として現はれたるものに就て其文義典據等の考證を明かにする一箇の學の名とす所謂言語學は此の如き文學に就て此の如き研究を勉むるものにあらざるが故に其名稱は彼國に於ても自ら別なり、彼國に於ては明かに我國に使用せる名稱と一致せるものを以て之を示せり、英の Science of Language 獨の Sprachwissenschaft 佛の Linguistique 之なり、尙我國に從來使用せられたりし博言學といふ名稱も亦語弊ありて今用ひ難し何となれば其名は實に言語に就ての學たることを示すに似たりと雖之を耳にするときは數多の言語を巧みに使用することを教ふる一種の學問なりとの想像を生ぜしむればなり、言語學は凡て言語といふ現象に就て勉て博く其材料を蒐集し一般に存する状態を調査し之が原則を研究することの必要を有すと雖決して各國の言語を自由に話説するを以て其目的とするものにあらず、故に此學を講ずるものは此名稱を避けて明白に其主題とするところ其目的とするところを示すに足るべき名稱を用ゐる、言語學即ち是なり、

言語學は實用的に言語を使用することを教ふるにもあらず又文字に顯はれたる

ものに就てのみ研究するものにあらずとすればフリードリヒ・ヒンツルが言ひし如く言語學の目的を實用的、フクロ、ギン、文獻學的、言語學的の三つに分つの必要なし、言語學は言語學的に言語を研究するに於て既に其能を盡せりといふべし、故に言語學の目的は實に單純なるものにして之を尙精細にいはいへば一般に世界の言語を研究すると各國の言語に就て研究すると言語といふものに就て研究するとに從て自ら異なるどころあり即ち各國の言語に就て之を研究するものは其國の言語が其國の言語と定まりてより以後如何なる變遷を経たるかを究むるものなり、世界一般の言語を研究するものは各國の言語を一應調査したる上に於て此等の間に何等の異同關係ありやを比較觀察して相互の聯絡を發見し系統的に之を配置して世界の言語は遂に如何なる有様にて階段を有するかを知り尙進んでは言語は其起源を一に歸すべきか將た多元に因るかを論ずるものなり、只言語といふものに付て深く研究するものは言語と人智との關係言語と發音機關との關係の如きものに就て恰も物理學化學の如き科學が検査するが如き方法を以て精密に研究するものなり、故にこゝに於ては心理的の研究生理的研究は勿論言語が人類

の交通の要具として存するからは社會に於ける影響に就ても亦研究の歩を向くるものなり

言語學の目的は道理に存するを以て其研究の方法從て二途に出づ一は歴史的研究一は比較的研究これなり、歴史的研究は其發達を知るに於て必要にして比較的研究は各國に通じて言語の異同關係等を知るに必要なり、フ、ン、ツ、ホ、フ、近世言語學の始祖なりは比較的研究に於て著しくヨハン・グリン(獨乙語の歴史に就て發揮せしところ多し)は歴史的研究に於て得るところ大なり、故に此二は明かに言語學の研究方法として依らざるべからざるものなり、此等の方法に依て得たる結果は進んで言語の能力言語の性質等言語一般に通ずべき諸原則諸現象を説明するに於て正確なる材料を與ふるものなり

言語學と他の諸學との關係

言語學は他の科學と同様に言語に就て其事實を蒐めて之を觀察し其上に行はるる原因結果の法則を發見し系統的に之を説明することを要するが故に自ら人類學人種學心理學論理學史學哲學比較宗教學等と相關係するところ尠なからず、彼

等諸學科が説明したる諸規則は言語學に於ても之を遵守して相抗するところあるべからざるなり、從て言語學が説明したる諸規則は彼等に取て亦有益なる材料を備ふることをあるべし、此を以て近世言語學興りてより彼等諸學に之を適用して得たるところある所以を概説することは無益の辯にあらざと信ず、

一、比較宗教學と言語學との關係

宗教學には宗教を主觀的に研究すると客觀的に研究するとの二方法あり、甲を理論宗教學理論宗教學と云ひ乙を比較宗教學比較宗教學と云ふ、乙を比較宗教學と稱すれども其内歴史的研究を含有せるを以て具さに之を分つ時は客觀的研究法に復二ありと云ふべし、即ち一は一宗教に就て其歴史的觀察をなして其發達變化を攻究するに在り、一は諸種の宗教を比較して其間に存する異同を觀察し從て相互の關係の有無一般宗教に通有なる現象理法等を表明するに在り、此を以て比較宗教學を研究するものは各自其研究の題目とする東西古今の宗教に關する經典を讀過して其精神を瞭了し詳かに科學的批判を下さざるべからず、之をなさんとするに當りては豫め此等經典が書かれたる國語を知らざるべからず、凡て此の如き有名なる經典は常

に多くの國語に翻譯せられざるを以て其譯本を以て之を覗へば足れるが如しと雖比較宗教學者としては大に然らざるなり、何となれば宗教はそれを發生せしめたる國民の思想に外ならずして言語も亦全時に其言語を用ゐる國民の思想より形成せられたるものなればなり、此理由を以て宗教學を研究する上に於ては必ず其言語を知らざるべからざるなり、勿論學者は言語學者にあらざるが故に言語學者が研究する如く深く之を究むることを要せず亦なすことも能はざるべし、其の研究に要用なる範圍内に於て言語の材料を蒐め言語の變遷を知るべきなり、即ち言語學が興ふるところの材料を以て其研究を資すれば可なり、比較宗教學と言語學との關係は實に此の如し、此種の要目は有名なる「マクス、ミユルレル」が夙に勉めたるところにして氏が「宗教學」は此を説きて明かなり、讀者其詳細を知らんと欲せば其書に就て見るべし、今は只該著中何人にも了解し易く而も喫驚したる一證を擧げて如何に此等の關係が必要なるかを示さんとす、

「マクス、ミユルレル」の宗教學四十五頁より四十八頁の間に左のことを記述せり、
 天地開闢の初め神先づ己れに形どりて男子を創造し、これに生氣を與へたり、次で

其助骨一枚を取て女を創造したり、此話をも「ヘブライ」に起る者にして「ヘブライ」にて骨といふ話を精神のとも身軀のともにも用ゐたるを見れば話の成立に於て如何なる思想を有せしかを知るを得べし、即ち身軀を稱するに用ゐる語と骨を稱するに用ゐる語との全等なる所以及び身軀骨を稱する語が精靈を稱する名となりたることを知るべし、これ恰も腹を以てこゝろ(腹がわるい)となす日本人の如き眼を以て精靈を稱する名となす亞刺比亞人の如きと全一例なり、又この時創造せられたる男女二人を以て神となし人間の祖先となして之を「アダム」「イーツ」と稱すされども此れまた其本源を尋ねれば「アダム」は實に男といふ、「ヘブライ」語なりしなり、「イーツ」は實に女といふ、「ヘブライ」語なりしなり、傳ふるが如く我等人間の祖先の名にあらざるなり、蓋し後代に至りて此二語の原意忘却せられたりしを以て遂に此等の特稱の名詞と心得たるなり、此の如き證明一たび成立してより舊約全書の創世紀を讀むもの大に見るところを異にせざるべからざるに至れり、此のみならず幾多此類の證明ありてより以來宗教思想の發達を検する上に於て其軀面を改めたるもの甚なからず、言語研究の宗教學に必要なことを知るべきなり、

此の如きは未だ一宗教に就きて見ることなりと雖所謂比較宗教學の本領として
數種の宗教に亘りて比較を弘むるに當りては言語上の知識の必要なること實に
多大なり、今左に何人も著しく承知せる例を擧げて云はんとす、

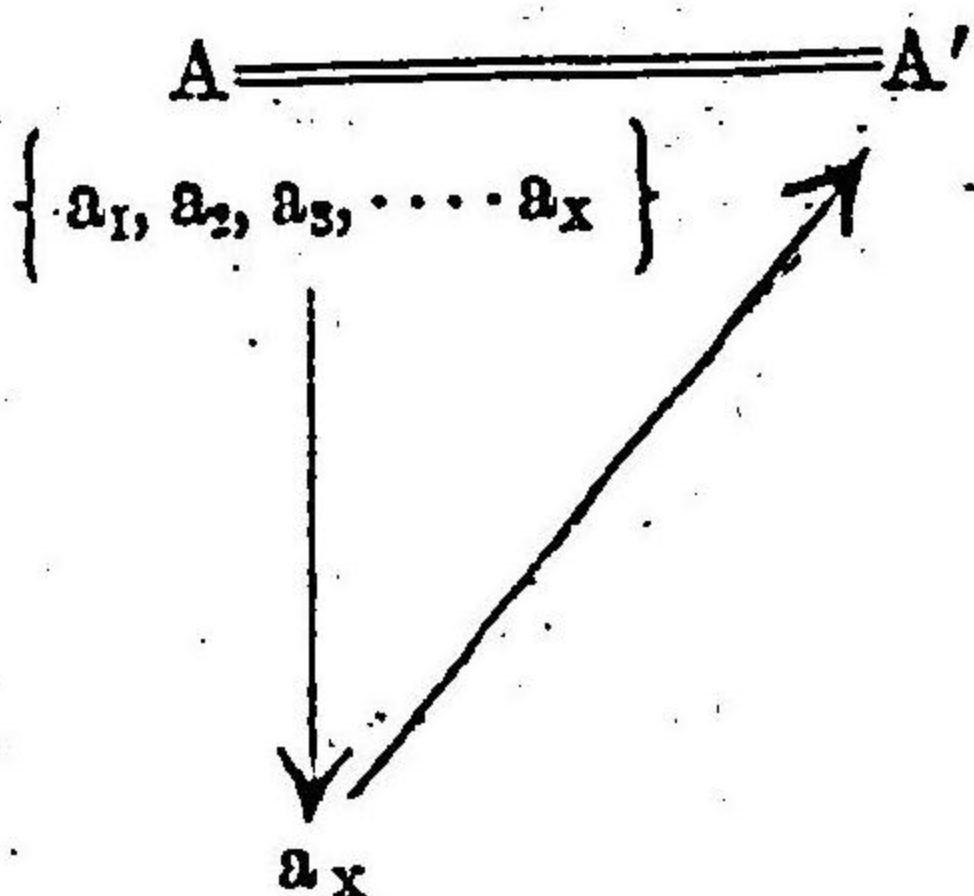
梵語	dyaush-pitar	ドイウシニピタル	(リク吠陀中にあり)
希臘語	Zou(s)-pater	ゾウイ、パテル	(オデュッセイア中にあり)
羅句語	jupiter = (jovis-pater)	ジュピター	
古獨乙語	tins	チウス	
エダ	for	チール	
英語	jupiter	ジュピター	
アングロサクソン	tiv	チヅ	

かく其形種々なりと雖も共に等しく天父といふ意を有す、音韻變遷の原則上より
見ても明かに同一根源の語より出でたるものなること知らる、こゝを以て今日の
英人獨人等は此語を以て或は相異なる意義に用ゐることありとも猶同じく至尊
の神たる義あるを知れり、即ち此語を研究し比較したる結果は此等諸種の人民は

もと同様の思想を以て虚空を崇敬したりし事を知るべく、此に對する此語は當初
「アリアン」人種が其故土にありし時此意を以て用ゐられたりしと知るべし、宗教學
者の研究すべき比較神話學の興味は實に此に在るなり、神話學を攻究せんとする
ものが言語の比較研究を忽にすべからざる所以は根本に在りて存す乞ふ之を一
言せん、

抑もこゝにAといふ實体ありてこれが有する屬性は $a_1 a_2 a_3 a_4$ 等なりとせばAと
いふ實体に與へられたる或名は其名の意義に於て $a_1 a_2 a_3 a_4$ 等諸種の屬性を有す
るにあらざ、常に a_1 か a_2 か乃至 a_x か或一屬性の名を以てAを總表するものなり、換
言すれば a_x を以てAといふ實体を示す符號となすなり、是を以てAに對する名稱
は、 a_x といふ屬性には適當なりとするとも他の屬性を示すことにはならず、さりな
がら a_x を以て一たびAを稱するところなるときは衆人認めてまた然りとし遂に一
定せらる、さて此 a_x といふ名稱は時を経るに従て其用法擴張せられてA'といふべ
き或具體的ならざるものにて應用せらるゝに至る、語を換へて云はば a_x の意義擴
まりて a_x が本來顯したる意義と多少關係あるものには總て移り得ることゝなり、

其間に於てAも亦 a_x と名づけらるゝなり、こゝに於てか a_x はAの名稱ともなりAの名稱ともなりて此兩者を同等のものと思へしむ、即ちAといふべき實體はAに等しとなしA'といふべき理想的のものを信仰する代りにA'に關係を有する實體を直ちに崇拜し之が傳説を生ずるに至る、これ即ち神話の起る所以なり、圖を以て之を示さば次の如し、



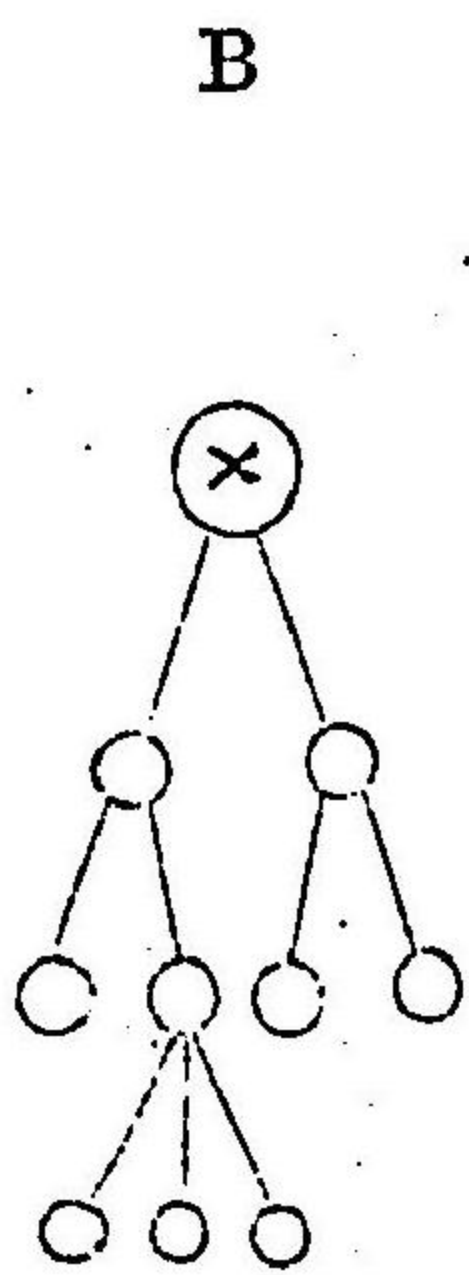
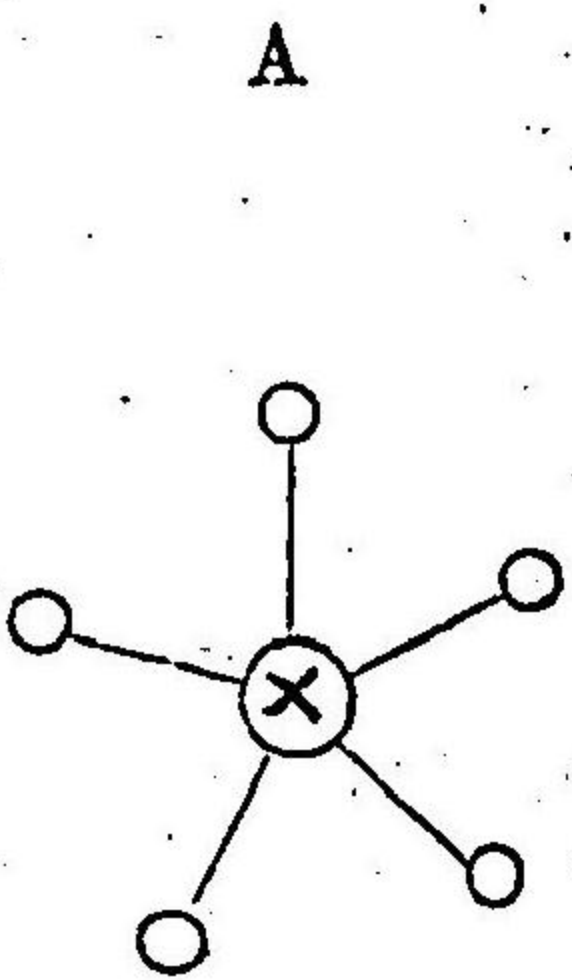
Aを太陽とすれば太陽の屬性中或る者を著しく認めて之を a_x 即ち日といはんか、太陽と其徳を同くし威を等しくせるA'といふ或る理想體をも亦 a_x 即ち日と名け若しくは關係ある或名稱を付せらるゝ事となり遂にはA即ち太陽を以て理想の究竟體と等しく考へて之を崇拜するに至るべし、

隨てA'に就ていはるべき種々の理想のことは悉くAの實體が實際なすこと、傳へらるゝなり、これに因て神話を生ず、要之神話は或辭が其意義忘れられて他義に用ゐらるゝこと重くなるるときに於て生ずるものなり、故に言語を研究するとは神

話の真相を知る上に甚だ必要なることなり、山と山と相戀ひ相争ひ或は人類國土を産むが如き奇怪の説も此眼鏡を以て検査せば其眞を知るを得べきか、比較宗教學、神話學と言語學との關係に就きては論ずべきところ甚だ多く從て其興味も亦大なりと雖こゝに之を詳にすべき餘裕を有せざるは遺憾とするところなり、

二、史學と言語學との關係

言語學未だ起らざりし前に於ては歐洲諸國民は其祖先を一にすることを知らざりしが如し、ポップの比較研究法起りてより言語上の類似聯關を發見し從て其血脈も亦一に出でたるならんとして推定せられたり、人種分布の根本を一元にするに就ても二説あり、左圖Aの如く考ふるものとBの如く考ふるものとあり、



何れにしても此の如く印度歐羅巴語を研究して之を話す今日の人種は共に一元

(111)

より出でたりとするとは全く言語學が興へたる光明なり、特に有史以前の社會を察し民度を知らんとするには言語學の證明を待たざるべからず、尙又現今に於ても記録を有せざる部分の事に關して、亦言語學の助けを借らざるを得ず、何となれば文字を讀みて其代のことを知るとは即ち其文字が表はすところの思想を窺ふことを得ればなり、其文字なきときは思想を窺ふ方法としては文字以外のもの求めざるべからず、建築物の遺趾繪畫等吾人の視覺に訴へて判斷し得る者あるときは文字なくとも其代を窺ひ得べし、されども此等のものは未だ吾等に完全なる材料を興へず、依て遂には言語に頼らざるべからず、然れども言語は語さるとき聞かるゝものにして其瞬間を過ぐれば更に復た捕ふべからず、殊に數百千の年代を隔てては之を正しく聞き取ること到底及ぶべからず、材料如何にして得らるべきか縱令得たりとするも既に古語其儘にあらざるを如何せん、過去の歴史事實を窺ひ得べからざるにあらずやとの疑ひ生ずべし、言語が一時に消滅して其痕跡を止めざることも事實にして其變遷することも亦之を知る、言語が變遷する間必ず一定の原則に據るものあることを教ふるは言語學なり、此原則を明かにす

れば過去より今日まで傳はり來れる言語に就て今日より其過去の形質を知ることを得べし、過去の形質明かなる言語數百を知るときは其間に於ける心理的關係意義の包括等明かなるに至るべし、このこと明かなるときは當時社會に於ける外界の事物より當時人心に存せし内界の思想亦知らるべし、即ち古代歴史の真相これに依て開發せらるべきなり、文字なくとも言語の研究正確にして着實ならば既知の歴史的事實と其他科學の證明とを借りて大に歴史事實の新發見をなすことを得るものなり、此の如くにして歴史を知らんとするもの之を *Linguistic Paleontology*

言語的古生學といふ、因に此學に就て聊か其小歴史を示さん、
「アーデルンク」といふ人初め「カザリナ」の遺志を受けて「ミスリテイツ」といふ書を著はし基督教の聖書を本として五百種の言語を蒐録し之を研究せり、此より以前は宗教的信仰の頑迷よりして世界言語の最初は「ヘブライ」なりとせしもの多かりしが氏出で之を打破し言語人種の根源は寧ろ亞細亞に在り歐羅巴の種々の人種はみな亞細亞大陸より移住し來りたるものなるべしと云ひ希臘語と獨乙語との類似波斯語と希臘語との關係をも認め梵語を以て根元語ならんと推し、同一元な

りし言語も年所を經たると人民が移住せる土地の氣候同じからざると彼等自然の習慣異なるとの爲に大差異を生ずるに至りたるならんと云へり、其云へるところは徹頭徹尾正當なるにあらずと雖吾等が所謂比較古典學の開發者としては稱すべき人なり、

これに次で出でたるを「フランス、ドイツ」とす、此の人は前にも云へるが如く比較研究の始祖にして事實を廣く集め組織的に成案せるものとして重んずべき人なり、梵語、ギリシヤ語、希臘語、羅旬語、リシアニア語、古スラヴ語、ゴチック語、獨逸語等皆其根元を一にせりと云へり、其他波斯語、アルベニヤ語、アルメニヤ語をも加へて皆悉く元を一にせりとす、これより諸種の言語中最古の者は何れなるか、從て人種の元と云ふべきは何れなるかの論を生じ愈進んで其他の人文に關する研究となりたるなり、此間「クレタ」「シラ」「アテラ」を経て「シラ」「アテラ」に至りて大に此種の研究を進めたり、「シラ」「アテラ」は言語的古生學を説く上に於ても廣く自然科学、一般史學、言語學、人類學の資を得たるを以て從來の學者のなし、如く危險なること甚少く從て他の科學が立言し能はざりし妙説も出でたるなり、其方法等に至りては後章言語

と人類との事を論ずるところに於て云はんとす、今は只言語學と史學との關係を述べたる傍ら史學に大なる助をなすべき新科學を紹介して言語學は科學的研究の新生面に如何に光を與ふるかの概容を添へたるのみ、史學を修むる人も亦言語學を補助科としたらんには大に裨益するところ少なからざるべし、殊に現今史家の注目せる蒙古西域の史の如き言語學の資によるべきもの多きを信ず、

史學が言語學を待つこと此の如し、言語學が史學に得んとするところ亦重し、即ち言語の歴史的研究に就て一國語が古來幾多の變遷を受けたる原因を追究するときは自ら其時代に於ける歴史事實を知らざるべからざるなり、殊に人民の移住、支配者の變更、他國への侵襲、他國人の侵入、社會制度の變革、文明の程度等は人民思想の發達變化、言語の増加混亂變態等に大影響を及ぼすものなれば此等は言語學の研究が注意すべきところなり、史家の供給を仰がざるべからざるところなり、

三、人種學と言語學との關係

人種異なりとて言語必ずしも異なるにあらず、人種異なりながら言語同じきあり、印度の黒人と英國本土の人との如し、人種同じとて言語必ずしも同じからず、人種

同一にして而も言語異なるあり、朝鮮人と日本人との如し、故に言語の同等は人種の同等を證明するに効なく、人種同等なるが爲に古今の言語を同うすと斷言するを得ず、蓋し同一人種も遠く相分るゝ事久ければ言語各自に變化を來し、新しく近接せる隣人の言語をとるを以て自ら言語上の差を生ずると大となるべく、異種の人民も相交通すると久しければ其言語を同じくするに至ると明かなればなり、是を以て言語の同等若くは類似は其人民間に交通のありたるを證し得べしと雖、人種等しと云ふを得ず、言語の同等若くは類似は聊か人種の同一なるか否やを檢する前に於て或は同一なるべしとの假定を與へ、人種學人類學が自ら研究したる結果をして有効ならしむるまでの力あるのみ、又人種の同等なるとは曾て其先き言語を等しくせし事あらざるかを疑はしむるに足ると雖、これ亦言語上に確かなる證跡あらざるときは其論實に薄弱にして遂に何等の效果をも得ざるなり、こゝを以て言語を證明の材料とすると甚大切なり、此等人種學者と人類學者とが共に言語學者と相交渉して講究すべき問題にしてこれを詳密に云ふときは前述の史學とも亦親しき關係を生じ來るを以て其要多大となる、印度歐羅巴民族として人

類學の上に大系統を立てしめたる理由は全く言語學の供給にかゝるものなり、言語學が一般科學の間に於ける地位知るべきなり、

四、心理學と言語學との關係

思想感情を表彰する要具として言語を觀察し、言語の構成上に於ける觀念聯合の狀況、精神活動の結果が如何にして言語となり顯はるゝか等を知らんとするとき、は言語學は大に心理學の補助を仰がざるべからず、この方法に就ては、スタインタール、ラツァルス等は、大に勉めたり、彼等が此點に於て造詣したるところは、甚多く心理學より進んで哲學の域に到り、精しく之を應用したるなり、實に思想は心の内にある言語にして、言語は聲音に表はれたる思想たる以上は、思想の事に關する研究は之を言語研究の上にも應用すべきと勿論にして、言語學が供給するところの材料は、資りて心理學者に益するところ亦大なるなり、社會心理を講ぜんとするもの、兒童心理を研究せんとするもの、皆言語の材料をとり、言語の原則を與へられざるべからざるなり、言語の意義の變遷等を論ずるに當りて、必ず詳論せらるべきところあれば、此間の關係亦自ら明かなるべし、冀くば之を後章に譲らん、

五、論理學と言語學との關係

論理學は思想の法則を論ずる學なりとせば言語の法則を論ずる文法家に必要なこと言ふを俟たず、文法家は又更に言語學の全面を知らざるときは少しも科學的の眼光を保つこと能はず、されば論理學と言語學との關係は甚親密にして言語の比較研究上大に文法を講ずるときに際しては一瞬も之を忽にすべからざるなり、論理學者が言語學を知らざれば名辭の本義及其多義等の關係其他誤謬を論ずる上に於て甚しき不都合を生じ、言語學者が論理學を知らざれば言語が文として顯はれ出さるゝ上に於て其秩序の整否如何を見るときに能はざるべし、兩者相互に關係を有すること適に他の學科に於けるよりも大なり、

六、言語學と教育との關係

言語學興りてより希臘羅何等の古語を研究するのみが教育の要務なりとしたる迷霧は破られ此等は死語なりとして避けられ生きたる言語の練習に勉めざるべからずとせられたり、これ偏に言語學が教ふる如く言語は次第に變遷推移するものにして古代の人は其當時其語を用ゐて其思想を示したりと雖今日に於ては其

思想は更に進歩し従て其新思想に對する新言語否古代より相傳はりながら變遷したる言語を使用して凡ての教育の基をなさざるべからずと云ふ原則に據れるものなり、一國の國語を教授すると云ふも其主眼とすべきは現今使用せる言語にありて古代の言語にあらざるなり、現今の言語を教ふるとは目によりて文字を教へ耳によりて語音を授け手を以て文字を習はしめ口を以て語音を發せしむるに在り、換言すれば視聽によりて得たる言語的知識を發音機關及び手腕を以て練習せしむるに在り、現今の言語がかくじて使用せらるゝ上は其國語に對する根本的基礎は定まるを以て教育の本義たる道義知識、身軀各箇の教育に於て普く正確なる効を擧ぐることを得べし、何と云へば此等の教育を受けて發展すべき心理學的事項は凡て言語の補けに據て學びもし習ひもするものなるが故なり、諸種の教育を受くるに適するたげ現時の生きたる言語を學び之を使用し得るに至りたる上は初めて歩を進め階を昇りて更に其語と同系に屬する古語を研究すべきなり、一國語の教育中に於ても特に現今用ゐるところの者より出立して次第に古きものに及び一國語の教育終りたる上に於て更に他國語の教育を受けしむると云ふと

はこれ即ち現今教育の主義にして、適きより遠きに及び低きより高きに到る直覺教育なるものなり、この順序を以て進みてこそ教育の効果も擧るべけれ、徒らに古典を弄び死語を誦して現時の言語にも思想にも符合せざるとに勞を重ね一種異なる語を用る文を綴り却て現今の言語と思想とに最適なる表彰法と練習法とを講ぜざるは實に教育の弊たりしなり、然るに近時聊かこの弊の破られたるが如く未だ破られずとも幾分か改良の途を立てんと企つるもの多きを加へたるは大に慶すべきとなり、これ偏に言語學が教へたるころ與て力あるによると謂ふべし、言語の根本的性質、實際的能力、文字の根本的價值、文字の具へざるべからざる性質、文字と言語との關係、此等二者が教育上に於ける力、國語が國民教育に於ける力等を講ずるものは言語學にしてこの原理詳かなるに至らば言語に力を借るべき諸種の教育の根本は助がざるべきなり、我國在來の如く漢字漢文の教授を重くすること、文章教授の方針一定せざること、古法假字遣に拘泥せること、文と言語と全く別立し従て其教授に困難を極めをることの如き總て尙改良を加へざるべからざる者多し、宜しく言語學の光明を與へて此等大切なる教育の基礎を立つべきなり、

尙此他言語學は諸學科と關係を持すること多けれども、之を詳細に縷述し往けば如何なる學科と確更に關係なきものなきことゝなるべければ、以上は只最も親しき關係のもののみを擧げて其間の有様を示したるのみ、哲學史、教育學、土俗學の如き亦此學を修むるものゝ爲に必要なるものなれども、此等は其相關するところの事項出でたる時に當りて云ふところあらんとす、

言語學の効用

外國語を研究するものが單に交通上會話用として言語を學ぶに止めず其語形語意の發達變化の狀況は勿論其文法上の構成につきて精細なる調査をなし科學的理解を得むとするには言語學の力を借らざるべからず、外國語のみならず我國の國語を根本的に研究して其實價を定め發達の方法を講せんとするもの亦言語學の智識を頼まざるを得ず、殊に其國語と其國使用の文學との關係其文學の實際的價值及之を改良すべき理由改良せんとする方法等に至ては凡て言語學的眼孔なくしては決して能はざるなり、これ言語學は他の諸學科より普く最近の研究結果を携へ來りて人間の言語に就て種々の方面より根本的秩序的に討究するものに

(三三)
 して前節に於て陳べたる教育に關することの如きは全く此學の智識を要するものなればなり、試に現今我邦に行はるる文法書を見よ、聲音を正當に詳細に解説したるもの何處にかある、文章構成法文章解剖法を科學的に敘述したるもの何れにかある、輓近聊か其の面目を新たにし組織を更へたるものなきにあらずと雖此等の點に就ては未だ満足なるものあることなし、否満足に近きものすらあるを見ず、言語學を學得したる著者の手に成れるものは漸く見るべきところを存すと雖尙彼等が國語に就て精細なる言語學的調査を遂げざると之を國語に應用する所到達ざるとの爲に著者自ら得意なる所も一般は之を解することを得ず、從て未だ以て我國語の文典として誦るべきものにあらずるなり、余輩徒らに此等を痛罵するを好まず、自ら亦其能くする所以を云ふにあらずと雖世尙は言語學の功用を悟らず、又一瞥すらこれに向けざるもの多きを慨くのみ、世之を認め之を用ゐざるに於ては偶此學理に基きて説く者あるも却て守舊派の爲に嫉まるるに過ぎざればなり、かの國字改良論の如き文章教授法の如き讀本編纂法の如き器々相叫びて而も其効を擧げざる所以のもの亦慚しむに足らざるなり、冀くば讀者後章説くところを見て此學の効用あるを覺らるゝあらば幸なり、

言語とは如何なるものか

自己の思想を表はし他人をして其思想を知らしむるに足るもの凡て言語なりと云はゞ言語といふべきもの一にして足らず、建築物は其時代の人類が有したる智力、想像力、信念等を表はしたる結果にして後人か之を見て其代の思想如何を覗ひ得べし、されば建築物は言語なり、勇士の激怒するところ美なる少女が憂に惱むところ等しく一面の畫布に遺りて後人に同情を起さしむるものは繪畫にして亦言語なり、此の如くにして思想を傳ふるもの彫刻あり器具あり、皆これ一種の言語と云ふを得べし、然りと雖此等は言語を最廣義を以て見るものにして我等は今然く廣漠たる意義に用ゐるざるなり、建築繪畫彫刻等は必しも特に思想を意識的に發表して他人に之を示すものにあらずれば我等は之を言語と云はざるなり、言語は思想を表彰するに要するもの若くは思想表彰の際に補助として用ゐらるべきものにして必ず或意思を以て之を用ゐる他人に傳ふることを以て目的とするものならざるべからず、此目的の爲に用ゐらるゝものならば先に云ふ繪畫も儘に言語なり、

(二四)
 繪畫の變化せるもの即ち文字にしてこれ又ある意味に於て明かに言語として論ずることを得、身振顔容も亦同じく此目的を充すことを得るが故に言語なり、然りと雖、繪畫文字、身振顔容は凡て之を視覺に訴へて思想發表者の思想を知覺するものにして未だ完全に目的を達せしむることを得ず、故に此等は口語を用ゐる得ざるものと雖、之を用ゐることを得、未開の人民は今も尙之に據るものありと雖、一たび口語の便益なることを知らば、凡て其使用を減ぜらるゝものなり、勿論文學の如きは口語を用ゐる得ざる特別の場合に於ても用ゐられ、殊に保存的の利益多ければ決して捨てらるべきものにもあらず、否、愈々其道に於て發達することあり、又身振顔容の如き強き感情を表はし容易に人をして感動せしむるに必要にして、慥に口語を用ゐて未だ足らざるとするを補ふ効大なるものなり、されども文學といひ、身振顔容といひ、思想交換の點より云ふときは、口語に對して補助的なるものなり、從位に立つべきものなり、口語は主要なる思想交換の機關にして、實に唯一の適者たるべきなり、今日に到るまで口語の發達して遂に言語といふ名は獨り口語の上に與へられて他の思想交換の機關を意味せざるに至るたる所以の理由蓋しこゝに在りて存す、今口語が遂に最後の勝利者たりし理由を考ふるに實に次の如し、

(二五)
 身振顔容は繪畫文字の如く、身軀を用ゐる上には別に筆紙等の機具を要することなく、身軀の部分を使用するものなるが故に、此點に於て彼に優れたりと雖、四者共に口を用ゐるよりは遙かに勞多く、且視覺に訴ふるが故に、暗處に於て使用することを得ず、障壁を隔て、通するを得ず、其時視覺の達し能はざる遠隔の地に直達せしむることを得ず、他の事の爲に身軀を用ゐる居る場合には全く使用することを得ざるなり、然るに口語は咽喉より發出する聲音を用ゐる口器鼻腔を借てなすものなるが故に、之を發するに於て勞少きのみならず、食物口腔に充てる場合の外は何時と雖、他の事をなしながら之を用ゐることを得、且聽覺に訴ふるものなれば、假令暗處に於ても人をして其意を知らしむることを得、眼を遮る物軀中間に横はるゝも亦能く聲音の波動を彼所に傳ふることを得べく、視力の達し能はざる遠隔の地に向ても亦之を聞かしむることを得べし、かくの如く口語は其利益最も勝れ、其使用最も容易なるものなるが故に、遂に思想交換の目的を充さん爲には主要なる必要物となりたるなり、

口語の所長此の如しと雖亦短所なきにあらず、そは聲音は時間的のものなるを以て話説の間一瞬一瞬を以て消滅し去ることなり、この缺點を補はんとして我等は文字を用ゐる文字に記載したるものは長く保存せられ相傳へらるゝ事を得ればなり、されども文字は口語を寫したるもの精しく云はゞ口語の幾分を寫したる符調に過ぎざれば此間大に差異あることを忘るべからず、口語に云ふところは如何なる巧みなる文字を以てするとも充分完全に甚だ精緻に寫し出すとを得ず、其寫し出し得たりと思ふものも能く之を觀れば決して然らず昔の精密なる分量の如き正確なる強度の如き一音と他音との連絡する點の如き凡て寫し出さるゝ者にあらず、文字は實に符調たるに過ぎざるなり、輪廓畫がよく其全面の意を示し得るか如く文字は口語の輪廓を撮りて思想を約束的に傳ふるもののみ、文字使用の廣がりたる爲文字を以て語音以上のもの完全なるものとすば大なる誤なり、此事甚簡單なる些事に類すと雖屢々我國學者漢學者否古學者に誤りあるゝところ多ければ特にこゝに注意するものなり、

言語と思想との關係

マクス、ミルレル博士は言語即思想思想即言語なりと主張し其著書中に屢々之を

論辨したりと雖此の如き説は既に學者間に採用せられざるに至れり、哲學者の間
 に於ても彼のシリンク、ルナン、ホッブスは言語なき間は純粹なる思想成立せずと云
 ひシライ、エルマ、ルも其デアロギエーの中に言語と思想とは全く同一のものにして内
 に存するものは思想にして外に顯はれたるもの即ち言語なり、言語は外に顯はれ
 たる思想にして思想は内に伏する言語に外ならずと云ひたり、マクス、ミルレルが
 云ふところ全く此と同じく言語なければ思想なしとまで云ひたるなり、スタイン
 タール、ホイトニ、ボラク等は大に此に反對し各確固なる辨駁をなせり、今此等諸家
 の所説を擧ぐるは却て煩はしければこゝに諸説の一致するところを取りて麻氏
 等の僻見たることを明かにせん、とす、

抑も思想と言語との間には何等必然の關係ありて存するに非ず、身振も顔容も繪
 畫も彫刻も文字も吾人が思想を交換せんとする目的に對しては等しく採用し得
 る方法たるを失はず、されども此等の間に於て、獨り聲音を用ゐる口語が最も廣く
 用ゐらるゝに至りたる所以のものは全く前に云へるが如く聲音の特質上適者た

りしを以てのみ、他の諸方法が思想交換の要具として絶對的不能なるに至らざるなり、さればこそ尙此等も補助として存在す、こゝを以て之を觀れば言語が特り殘りて最も廣く用ゐられ遂に今日缺くべからざるものとなりたるは全く人爲的約束的の結果にして思想とこれとの間に根本的必然的連絡の存するに非ざること明なり、思想は言語に依らずんば成立せずと云ふことを得ざるや亦明白なり、尙之を反面より觀察すれば愈々炳焉たるものあらん、即ち彼の啞生若くは下等動物に例をとらば如何、啞生は聲音を用ゐること能はず指頭を操りて彼等の間に思想を交換するにあらずや、彼等は耳を用ゐず眼を用ゐてよく事物を判斷し他の思想を知り屢々高妙なる考察をなすことを得言語なければも尙能く此の如し、何ぞ思想は言語なくしては成立せずと云ふを得ん、言語なくんば思想なしと云ふ者啞生が技術に巧みなる者を見れば其智識を得たる所以思索を凝らしたる所以の理由何に依てか説明せんとする、人間以外の他の動物は遂に何等の思想をも交換せずして生存すと云ふや、最近有名なる心理學者ワントが動物心理を説くを聞け動物は話すこと能はざれども能く其情を通じ想を顯はせり、言語必しも思想交換の唯一手段にあらざるや著し、尙又翻て嬰兒を見るに未だ口語を操ること能はざれども其爲すところ實に理解の結果知覺の表彰たることを知るべし、人漸く長じて其言語を使用すること慣るゝに従ひ記憶したる語數益増加し精細なる思想をも亦能く之を以て示し得るに至るや言語を知れることの結果が大に理解を助け思索を發ふこととなる、こゝに於てか言語の必要は益、膨脹して複雑なる事項深遠なる意義を會得せんとするには言語なかるべからざるに至るなり、此の場合の狀況を見て其起因も亦然りと推定し却て因果を誤り本末を失するに至るは愚なりと云ふべし、故に我等は思想と言語との關係は遂に左の如く斷定せざるを得ざるなり、思想を表彰する爲言語を借用したる結果言語ありて始て思想の成立あるが如く見ゆと雖其實言語と思想とは必然的聯絡あるものにあらずして吾人の心理作用こそ明かに理解思索の根本なれ、

言語の起源

前章に於て既に述べたるが如く吾人が所謂言語とは聲音的符調のことにして之が思想交換の要具となり社會人類の間に大に用ゐらるゝに到りたる所以は偏に

適者生存の原則と自然淘汰との結果に因ること明かなり、顔容身振が思想交換の要部として用ゐられざる理由も亦他にあるにあらず、思想と聲音言語との間に必然的原由あるにもあらず、其聲音言語が思想を發表する具として適當なる所以は既に之を説きたり、これより此適者は何故人類のみに存して他動物にあらずるか、人類のみの特有物として其最初の起原は如何なるものなりしかの問題を考へざるべからず、

一、何故に言語は他動物に無くして人類のみに限られたるか

人類以外の他動物は聲音を有するものありて或は叫號し或は悲鳴し或は囀語し此等を以て其感情を示し意志を傳ふ、犬の尾を動かすが如き亦身振を以て其感情を示すものなりと云はざるべからず、然れども其聲音や未だ之を言語と云ふを得ず、其身振や未だ充分なる思想交換の法たりと云ふことを得ず、彼等は此の如くして其思想を交換する方法を有せりと雖其法甚劣等にして人類の比すべくもあらず、最も寛大に云ふときは所謂最廣義の言語を有せざるにあらずと雖其方法不完全なるが故に遂に之を言語と稱することを得ざるなり、他の動物は何故かくの

如く不完全なるか、其理由果して何れにあるかと問はゞ余はホイトニー氏が「言語發達論」第十四章に云ふところを以て答に代へんとす、今之を左に示さん、
言語の發生を助くる力は多少人類以下の動物にもあるべきかの問題は其解明を心理學者に譲らざるべからず、されども未だ此の如き解明を得ず、蓋し或は要なきことならん、此力が一方に存して一方に缺けたる所以は兩者に通有なる能力に於て既に自ら程度の差あるを以ても知るべきことなり、事物を比較して其性質の異同を辨別して其特性を認知する高尙なる力、意識を制取する力、及び自己の動作すること、感受すること、を自覺し他の心的活動を認知する力等は、實に下等動物と人類との間に區別の存する原由なりとす、然れども下等動物には言語の能力を得る丈のもの全くなしと断定するは甚しき謬見にして、彼等が符牒を把へて之れに己れの思想を結付くる事甚明瞭にして充分なるを以ても所謂知識を所有せりと云ふことを得べし、唯其發達程度は低きを以て實際完全なる認識完全なる聯想を成立することを得ざるなり、これ動物が到底及ぶべからざる大差異が人類とそれとの間に先天的に存すればなり、

と云ひ下等動物が言語の能力を有せざるは其が其他の技藝に於ても社會の文化を昂進せしむる程の能力なきと一般に之を深く説明せずして可なり人類が諸般の學術技藝の能力を有し猶且文化の重要な元素たる言語を有するは果して如何の順序に依るかを説明すれば足れりとせり下等動物に言語なき所以は實に言語學が討究すべき問題にあらず、そは比較心理學が窮明するところなればなり、故に余輩は今唯兩者間の此大差異が其心的活動の差異に起因するものなりと断定して大に追究するところあらざらんとす、唯人類が言語を有するに到りたる順序を次節に於て説明し、自ら下等動物が之を有せざる理由の存するところを知らしめんとす、

二、人類言語の起源

此問題に就きては古來數多の哲學者の腦を煩はしむところ多ければ以下漸を透ひて聊か從來の研究を叙述し各之を評論し終りに至りて近世學者の用るるところ及びばんとす、

1. 神傳説

これは言語は神より傳授したるものなりと云ふものにして古くは希臘の哲學者プラトンはクラチコス中に之を説き其後ユースミルロ、ハーマン等同じく此説を主張す、ユースミルロ (Susmilch) 曰く思想ありて而して後言語あり、完全なる思想なければ完全なる言語あることなし、而も其完全なる思想を有するものとは宇宙の間唯神あるのみ、神は完全なる思想を以て完全なる言語を創造し之を人類に授けたりと、ハーマン (Hamann) は言語は人類が本能的に具備せるものにあらず必ず之を教へ之を傳ふるもの先づ有らざるべからず、而して人類の最初に溯りて其傳授の地位にありたるものは神を措きて亦誰かあると云へり、アムシカート (Abbe Sicard) のシラメール、セテラル (Grammaire generale) ヲボナルド (de Bonald) のレヂスラシヨ、ノプリミチツ (Legislation Primitive) 共に前二者と同等の説を載せ、人類が思想を發表せんとするに先ちて其方法手段を授けたるものなくんばあらず、神は即ち之を創造し之を授けたりと、これ即ち神學的假定説にして神を以て無限の有力者と思惟して思想と言語との關係を熟察せざるものなり、人類が考察し得る限り之を考察して断定を下したるものにあらずして聊か説明に苦しむところあるときは一も

二もなく直に之を神の不思議力に歸せんとするものなれば畢竟學術的討究を試みざる懦夫の愚言のみ、是を以て神學の爲に眩惑せられたるものには用ゐられたりと唯近世學術の進歩と共に全く破棄せられて遂に何人も全然加擔するものなきに至れり。

ろ、自然説

これは言語は本來人類に具有せらるゝものなりと云ふものにして此間種々の異説を存す。

第一、言語は必要起りて人が造り出したるにもあらず、また或る企圖を立てし人が製出するものにもあらず、只これ人類の一本能のみ、人類が生れ出で、自ら具有せる思想と自ら具有せる聲音とを相結合せしむる能力はこれ人類自然の力なりとフムボルト(Humboldt)は主張し、ポット(Pott)も亦全く人類の言語が一本能たることは雞の晨するが如く蜘蛛の網を造るが如くなりと云へり、ハイゼ(Heyse)の云ふところまたこれと等しく、人類の生來に存する自然力にして意識を用ゐて造るものにあらずと云へり、佛のルナン(Renan)は人類が天性思索の力を有する動物なり

といふことに同じく言語を用ゐる能力は、自然に存すと宣言して最初の人類は言語を有することなく、後に至りて意識的に之を作りたりと云ふ説を駁して憐むべき亡論なりと笑ひたり、これこの派の學者が云ふところは言語の現象を全く自然力に歸せんとするものにして極端なる自然説と云はざるべからず、特にハイゼが云ふ如く他動物の本能的行爲と同等に見るは甚しき獨斷と云ふべし、フムボルトは明快なる腦を具へ鋭敏なる觀察をなす人なれば其所謂聲音と思想とを結合する力とは如何なるものか其結合の有様は如何なるものなるかを精査したらんには恐くは實驗的學術が報ずる結果に符合するところありしならん、偏へに本能なりと速断せしは聊か考察の足らざる嫌あるを免れず。

第二、は言語の本體たる聲音は自然的にして人類の意思力與りて始めて言語をなすなりと云ふ、此派にはスタインタール(Steinthal)と、アムス(Ams)と、ワント(Wundt)と等屬せり、スタインタールは其著(Abriss der Sprachwissenschaft)に記して曰く言語は一種の反射運動にして初めは只外界の刺激を受けて之に應ずる音を發するに過ぎず、勿論この間は未だ言語と稱すべき資格を有せず、唯自然に存する聲を用ゐる

ものにして人間として特有なる意思の力を加へたるものにあらざ、依て之を自然
 聲音と云ふべし、この時より更に進んで人間が自ら己れの意志を用て社會交通の
 爲に聲音を操つるに到りて始めて言語となるなり、と云へり。

ラツアルスは人間が外界に觸れ其刺激を受けて發する反射的發聲は智力の進歩す
 るに従ひて意思の制裁を蒙ることとなる、此制裁力が自由に行はれ意識的活動愈
 進歩して言語の完成をなすものなりと云ひ前者と其説異なるところなし、只ツット
 の説く所は之に似て聊か其様を異にせるものあるが如し、氏は人類に刺激を與ふ
 る外界の物に對し人類が其刺激に應ずる運動を主觀的に表はすものを論じて其
 聲音の上に表はれたるを語聲とし身軀の部分の運動に表はれたるものを身振と
 いひ二者實に同類のものなり、此二者中の語聲を意識的行爲として發するもの即
 ち言語なりとせり。

以上三者を自然説を唱ふるもの、第二派とす、要之凡て自然説を唱ふる人は議論
 屢、抽象的に走る弊あれども其理學的研究の結果は甚しき謬論を招かざるなり、只
 實驗的研究のいよ／＼進歩して此等諸説の實際的價値の定まらん事を望むもの

なり、

は、實驗説

これは言語を實際に研究せし人の唱ふるるところにして、ノアールン(Noire)ノアールン、
 (Rousseau)ガイゲル(Geiger)これに屬す、ノアールンは言語の起源は自然音が約束的に
 人類間に使用せらるゝときに在りとしガイゲルは物躰とこれに對する音的符牒
 などが相結合して定めらるゝは全く偶然に出づるものなりと云ひ、ノアールンは働聲
 相伴説(Clanor Concomitans)を唱導せり、此説はマクスミューレルも賛成せるものにし
 て左の如し、數人相集りて相働くとき即ち或は穴を掘り或は船を漕ぎ、或は木を伐
 り等するとき其働作をなすと同時に發する音聲あり、此音聲は大に働作を容易に
 なし敏捷になし其効果を大ならしむるものなり是を以て其働作は屢、反復せられ
 これに伴ふ音聲も亦屢々せらるゝものなり従て其働作も其音聲も相集まれる衆
 人が著しく認知するところとなるべし、即ち此働作には此音聲従ひ彼音聲は彼働
 作を起す時に生ずるといふことを知らるべし、こゝに至りて始めて或働作を名づく
 る音聲定まり其應用いよ／＼擴張せられて此と同類の働作は凡て此音聲を以て

稱することゝなるなり、かくして一定したるもの之を語根とす、と

これは甚奇説にして相應するもの少なしされど、尙實驗派の説として著しきものあり、これ即ちダーウソンの説にしてかの感聲説 (Interjectional theory) と寫聲説 (Onomatopoeic theory) との二を以て言語の起源を説くものなり、前者は即ち自己の感情を發表する時に用ゐる悲鳴叫聲怒號の如きものを原始として發達したるもの言語なりと云ふに在り、後者は自己以外の自然物體の音を模倣して其物體を示す符牒となすこと假令ばカラス、キリギリス(其鳴き聲を真似て造りたるものなり)等の如きものゝ起源これなりとす、これはホイトニー氏及びウヰグヂウヰド氏等が贊成鼓吹せるところなり、此説に劇しき反對をなしたるはマクスミルレル博士なり、氏は其著 (Lectures on the science of language) 第一卷の末章に之を論じ甲を以てプープリ説 (poo-poo theory) と嘲り乙を稱してワンワン説 (Bow-wow theory) と笑ひ、ギートニー氏は其著言語論第十一章に之を携へ來り名聲高きマクスミルレル博士はベルリン大學のハイゼ教授の説を信じて萬物凡て打てば鳴るものなりと主張し吾人人類も亦此に類せしめ遂に言語を以て人類が發生する自然聲なりと斷じ去ら

んとす實にこれドンドン説 (Ding-dong theory) と稱するを以て適稱なりとすと大に抗論したり、我等は最公平なる見を以て之を考ふるに摩氏の説は最も笑ふべき僻説にして寧ろ憐れにも何等の價値なきものと斷せざるべからず、これにつきて氏の云ふところを詳にせん、せば氏の著 (On the Science of thought) を見るべし、さて此進化論派の云ふところは今日一般に信用せらるるものにして原始言語の種子を此二となしこれが發達して言語と云ふべきものになるは社交廣くなりて其使用繁くなり意識的の使用加はる時にありとするものなり、これにつきてホイトニー氏は數紙を費して詳論するところあれども今こゝに之を概示すれば以上のことに過ぎず、以上を實驗派の云ふところとなす、

因に記さんとするは此寫聲説を考へたるもの我國にもあることなり、そはかの鈴木明と云へる人にして文化十三年に出版せられたる其著雅語音聲考は日本語に就て具さに之を説きたり、所説未だ充分系統的ならざると屢、誤りあるが如しと雖それ等は科學的知識を有せざりし古人として之を恕すべし、其思考の能くこゝに想到したりしは稱揚せざるべからず、

この説に依れば人類の言語は實際上より見れば人の力を以て其意志に従ひ自由に使用し得と雖其操縦の原動力は人類に存する先天的能力に本づくなり云ふなり、これ即ちセースが云ふところの言語の製出力(faculty of making speech)を以て先天的なりとするものなり、この説は人類を以て萬物の靈長なりと断定し下等動物と人類との差異を著明にせんが爲に言語の能力を以て特に自然的に人類に存するもの若しくは最初人類創造の時神が授與したるものなりと云ひ、人類の言語は其根源數多なることを承認して其理由は全く神より與へられたる此能力より各自産出するに據ると立つるなり、此學説を抱くもの多くは僧侶にして神傳の頭説を固持しながら近世科學の齎すところを參酌せんとするが故に此誤謬に陥るなり、思想と言語とは同一なるものにあらずといふが如きは彼等が信じて疑はざるものなるにも關はらず言語的能力の起因を精査せざるは實に憐れむべし、この派に屬する人にはトーマス・アクィナス(Thomas Aquinas)サールキル等これなり、以上の如く言語の起源を論ずるもの種々あれども熟、此等を考ふるに凡て大差なきが如し、若しそれ根本的に之を討究せんとすれば遙かに其大古に溯り其淵源を探りて歴史的追究の結果如何なるものが根と稱すべきものなるか其根が言語の最小原素として或思想を示すものなりとせば其思想は何によりて其根と相連合せしか且之が結合をなさしむる方は如何なるものか此能力は他動物になくして人間のみでありとせば人間は何時此力を得しか此力は數代を経て得たるものなりと云ふの説確かならば其次第は如何人間と類人猿との間に此を説明すべき連鎖を見出し得るか等歴史的探究より溯りて心理的に立到り甚深なる研究を要すべし、然りと雖前章既に述べたるが如く、言語學は歴史的科學にして認得したる事實の上に就て其系統關係を論究するものなりとするときは寫聲説感聲説の如き假定説を研究して其果して實に合ふや否やを檢定したる上實に合すとせば此を以て其原始を定めて可なり其原始の由來等に亘りては已に歴史的資料のあることもなく又歴史的に追究し得べき事にもあらざるなり、故に言語の根本起源はゾト等の云ふところの如く感情を表示する聲の發達なりと定めてこれを事實に徴し其より以上の論は言語學以下の問題として可なりと信ず、古來幾多の思索家は

きが如し、若しそれ根本的に之を討究せんとすれば遙かに其大古に溯り其淵源を探りて歴史的追究の結果如何なるものが根と稱すべきものなるか其根が言語の最小原素として或思想を示すものなりとせば其思想は何によりて其根と相連合せしか且之が結合をなさしむる方は如何なるものか此能力は他動物になくして人間のみでありとせば人間は何時此力を得しか此力は數代を経て得たるものなりと云ふの説確かならば其次第は如何人間と類人猿との間に此を説明すべき連鎖を見出し得るか等歴史的探究より溯りて心理的に立到り甚深なる研究を要すべし、然りと雖前章既に述べたるが如く、言語學は歴史的科學にして認得したる事實の上に就て其系統關係を論究するものなりとするときは寫聲説感聲説の如き假定説を研究して其果して實に合ふや否やを檢定したる上實に合すとせば此を以て其原始を定めて可なり其原始の由來等に亘りては已に歴史的資料のあることもなく又歴史的に追究し得べき事にもあらざるなり、故に言語の根本起源はゾト等の云ふところの如く感情を表示する聲の發達なりと定めてこれを事實に徴し其より以上の論は言語學以下の問題として可なりと信ず、古來幾多の思索家は

(四二)
 我此々起源を解明せんと試みたれども凡て空論妄想に過ぎず一も科學的確實なる價を有するものなき所以は一方に於て言語學的科學知識のなきと事實に徴せざるとに依る故に余等は最近の言語學者が教ふる如く此等を以て歴史的初代迄の事を研究し其より深くは入らざらんとす吾人は言語哲學を説かんとするものにあらざればなり、

言語を習得する有様

吾人が言語を有するに至りし事及び此を習得する有様を知ることには言語を研究するもの、最先に知るべき要務なり抑も吾人が言語を使用する様を観察するに各其自己の小兒時代を忘れたるが爲又他の小兒につきて研究すること屢々誤れるが爲言語は祖先より遺傳したるものと思惟することありこれ大なる謬見にして其非なることは吾人が平常見るところの事實に徴して明かなり凡そ世界各國其人民を精査せば何れの國と雖も數種の國民を混合せる事少なからざるべし殊にかの北米合衆國の如き歐羅巴諸邦の人は固より其他數多の人種を交へたり然れども彼等は決して徹頭徹尾其祖先の言語を保持することなく一般通用の國語を

自由に使用して大なる差異あることなし勿論其各人が故國の土音は尙保持せられて談話の間聊か相異なるどころ知られざるにあらずと雖此の如きは同一國の方言的特徴に於ても見るところなれば此場合に於て差異ありと云ふ程にあらず、又日本に來れる外國教師の小兒を見よ彼等は其家庭にありては父母と相語る間其國語を使用するならんされども我小學校に通ひ我邦人の兒童と相遊戯するに當りては巧みに日本語を使用して一聞大なる差異なしこれ皆其言語が必ずしも遺傳的のものにあらずして其使用するところに制限なき確證なり故に此の如き謬見は先づ之を避けざるべからず次に言語は各箇人が其身體の發育と智識の發展とに従ひて自然に其能力を發揮して創作するものなりと思ふことありこれは聊か理あるが如く聞ゆれども然も甚不當なる妄想にして一たび小兒が言語を用ふる事實を檢せば直に其否を覺るならん若し兒童が發育につれて自ら創作し得るものならば單獨に放棄せる兒童も自ら語を作るなるべし埃及の王サムメチクヌ、メラベデン王、フリードリヒ二世等古來兒童が自發する言語を檢せんと大に盡力せし人多しと雖其成效したるものも僅かに二三の音を發したるを以て種々

(四四)

の附會を試みたるに過ぎず、遂に充分に兒童の創語力を認めたりと云ふものを聞かず、人類としての理性を具有せること動物としての感情を音聲に發表することはなし得るに相違なしと雖、吾人が所謂言語を創造し得る確證あることなし、言語が已に遺傳的に存するものにあらずとすれば、其先人が言語を使用したる力が自然力にあらざること明かにして、後人亦自然の創作をなし得ざるや明かなり、さて言語が各箇人に創造せらるゝものにもあらず祖先より遺傳するものにもあらずとすれば、何如にして之を使用するに至るか、これ今章に論ぜんとするところなり、余等は言語習得の順序を叙述するに當りて、先づ兒童が如何にして言語を使用するかより、説き起さんとす、抑も兒童は其出生以後六ヶ月間程は全く無意識的に四肢を動かし、顔容を變し、音聲を發するものにして、以後漸次に意識的の動作をなすものなり、殊に發音器官を練習するには、時日を要すること他の機官に於けるよりも多く、幾多の時日の間に他人の口唇身振を見て之を倣ひ、自ら再演するに至るものなり、其之を再演するまでの間に於ては、他の人の行爲につき、物と名との聯結を習練するなり、これには同一事物が同一稱呼にて唱へらるゝこと屢々なる

ことを要す、數度同一場合に遭遇して物と名との關係を知覺し、己の口を以て之を眞似るなり、初は發音器官も未だ充分なる練習を経ざるを以て、巧みに精密に他人の音を眞似ることを得ず、甚不完全に覺束なき片言を出すのみ、且其音の不完全なると同時に、其稱呼と其物との關係明瞭ならざるを以て、其名の意義は甚漠然と認めらるゝなり、故に父母の如く我より長せる人は、等しく同稱呼の中に包められて區別あることなし、隣人も他郷の人も我實兄も等しく「一サン」と稱するが如き、皆これ差異の辨別甚淺きが爲なり、此の如き不完全なる言語の片影も、其周圍に接する時間長きを加へ、經驗を積むこと益々多ければ、次第に語數を覺ゆることも多く、意義を區別することも細密になりゆくなり、尤も此間種々外界が與ふる知識は、彼等の心的活動を敏活ならしむる等、幾多の他因ありと雖、言語的材料の増加、其使用の擴張の如きは、全く言語の練習を繼續したる結果に外ならず、これ外國語を學習する人が、數月休課したる爲、全く忘却し去るを見て、明かなり、此を以て之を觀れば、言語の習得は、徹頭徹尾他より傳與せらるゝによるものにして、更に創作に基づかざるを知るべし、知識已に具はりたる上に、言語を創作することもあるべし、要之、言

語は練習と經驗とに基原する思想の表彰法にして兒童の時自然の能力と都合よき事情とに伴ひて之を使用し吾人が觀察し分類し抽象したる結果即ち符牒を襲用するに外ならず人は以上の如き順序を以て其周圍に親近せる物狀状況動作等に就て其言語を學ぶより初めて社會上其經驗を重ねるに従ひ次第に其範圍を擴張して種々の事項に對する言語を習得し其言語材料を收藏すること愈々多きを加ふるに従て益々智識の容量を増加し智識愈々發達するに従ひ言語の數亦多きを加ふ此の如くにして終生代るく言語を習得すること限り無きものにして智識の發展も亦これに依て限りなきものなり故に人類は其小兒の時より死に至るまで常に言語を學習せるものといふとも不可なきなり又智識は言語の補助を借りて愈々精緻に到り複雜を加へ遂には高尚なる抽象的事項をも思索し得るに至るや明白なり言語あるが故に智識ありといふにはあらずれども言語の補助なき以上は固有の思想は巧妙に運轉活動せざるなりこれ言語習得の間には其の言語を習得することのみならずこれに連れて其の心的活動著しく行はれ分類抽象觀察の方法爲に習熟せらるべければなり換言すれば吾人に言語を教授せらるべき

に於て其言語が示すところの高尚なる知識は自己が一々創想するに及ばずして直に教へらるべければなりこれ即ち其國語の歴史上其國語を用ゐし先人の智識を授けらるゝに外ならず是に於てか言語を所有するが爲に生ずる利益は實に多大にしてこれに依りてこそ物質界以上の事を思索し得ることも甚だ複雑なる理想を明白に表彰することも得るなれ

附外國語を學ぶ方法

外國語を學ぶ方法を論ずれば各個人が自國語を學ぶ次第に就きても自ら知り得るところ少からざるべければ吾輩は今因に外國語を學ぶ方法を述べんとす外國語を學ぶ方法も亦自國の言語を習得すると差異あることなし世人往々外國語を學ぶことは自國語を學ぶよりも難きが如く思ふものありと雖これ決して習得することの難きにあらざるなり吾人が外國語を學得する能力は自國語に於けるよりも弱しといふべからず只其學得することの自國語に比して遅々たる所以は別にありて存す即ち自國語は出生の時より初めて常に其耳朶に達し一舉一動皆之と伴ふ如き有様なるを以て之を聽受せざる時間なく自己の必要を充たし己が意

(四八)

志を全うせんとするに於ては是非之を反射的に使用せざるを得ず隨て其練習を積むと念々多し尙又自國語は祖先以來數代の人心に一致し自己の周圍に話さる言語は其耳に聞き口に味ひ眼に見手に觸るゝ實際の状況と共に教へらるゝと同時に知識未だ淺弱なるときはそれに應ずる程の語を以て語明せられ告知られて漸く長ずるに及んで従前已得の言語的智識を基としたる種々の語を教へらるゝを以て其習得の順序甚だ階段的にして自然的なりかるが故に自ら其困難を認めせざるのみ之に反して外國語は此の如き順序と時間とを以て教へられず時として未だ目に見ざる耳に聞かざる事物に對する言語を教へられ時としては大に其思想の表彰法相違せるものを暗記せざるを得ざるが故にこの點に於て習熟の難自國語よりも多きなり決して人間としての能力が彼を得るに難く此を得るに易き程差異あるにあらず外國に移住したる本邦人の小兒を見よ能く彼國語を操縦し得るに非らずや外國宣教師の兒童が數ヶ國の言語を使用し得るにあらずや彼等は其習熟の時充分なるが爲其習得の方法手近きが爲然るなり本邦人と雖その自國語を學習したると同等の手續きを以て外國語を學ばゞ幾ヶ國の語と雖

何ぞ習熟し得ざるとあらんや試に自國の小兒が使用する言語の數を計算するに實に數百を出でず此等僅少の語數は而も能く小兒の必要を充たすに足り他人亦能く之を理解するに難からず外國語を學ぶ者の語數も亦初めは實に此の如きのみ而も只能く之を運用せば彼我の普通用に充つるに足るべし小兒は自ら恥ぢず進んで之を使用す故に習熟甚速かなり習熟速かなるに從て語數を増加すると日々に多く知識の發達著しこれ其經驗する範圍擴張すべければなり外國語を學ぶもの亦然く恥ぢず懼れず勇進之を勤めなば其熟達何ぞ難からん開港市場の車夫馬丁が無學なるに係らず猶能く外國人と相語りて其意を通ずるに著しき障礙なきを見れば何人も亦これをなし得ざるにあらざるを悟らん是を以て外國語學習の方法を其小兒時代に自國語を學びたるが如くせよといふに終るなり

外國語を學習する事久しければ從て其經驗の範圍を廣め其經驗内に於ける言語は逐次増加すこれ尙自國語に於ても然り即ち人は長じて教育の功を積み職業を定むるに至り此間得るところの言語其數を増加す然れども其等の言語は經驗の範圍内に存するものなるを以て甲社會に屬する人の言語は乙社會の人のと自ら

異にして高等なる教育を受けたる者の語数は然らざるものに比して多量なり之を要するに教育の如何と社會上の位置とは大に使用する言語の種類と數とに關すること多し此等は労働者が幼時少許の教育を受けたるのみにして直ちに生活の目的に向て社會に出でたるものと高等なる教育を受けて學術界に立てる人士とに徴して明かなる事實なり

尙又外國語を學習したるもの、言語か其思想に及ぼす有様を考察するに此の如き人は常に外國語を用ゐる爲に自己の思想を其言語に相應せしめんとする傾向を生じ之を表彰する方法は彼に化せるゝに至る殊に學術的方面に於て自國語の結構外國語に譲る所あるが如き場合若しくは社會の進化上彼國の文物を輸入して其便益を慕ふが如き場合に於ては大に然り本邦に漢語が多く輸入せられて普通となり文章の構成に迄其勢力を及ぼしたる所以近くは現時學術界に著しく外國的思想の入りたる所以皆これに外ならず然りと雖如何に外國の言語輸入せられ外國の思想通用せられたりとも決して根本的に自國の措辭法を變更するとなきは大に注意すべき事なりこれに關しては後章更に説明する所あるべし

言語が通用せられ播布せらるゝ理由

上章既に記述せるが如く言語は其を以て顯はれたる思想と必然的關係ありて出來るものにあらず人為的に或思想に對する符牒を定めたるもの即ち言語なり而も其符牒たるや眞に符牒にして其が表彰する思想に對しては甚疎雜なり此の如き疎雜なるものなるが故に精細なる思想殊に哲學的緻密なる思想を表彰せんとするときは已得の貧しき言語材料のみにては充分に其意を遂ぐることを得ずこれを以て教育と經驗とに依りて得たる智識に基き種々彫琢を加へ改造を圖りて其目的を達せんとす然れども到底符牒は符牒に過ぎずして特に其改造したる語詞に付て定義を施しおかざれば個人間の解釋區々になる恐れありて所謂約束的符牒の功成らざるなり而もこれありてすら甲學者の所説は乙學者の見解と異にして大に議論を醸すに至るは珍しからぬ事なり又普通の人は言語を使用する間に於て其語が顯はす正確なる意義に用ゐんともせず幼時より觸接したる周圍の社會が教へたる儘に之を使用し甚しきは己が想像したるところ誤記せるところを以て其言語を運用するものとさへあり故に言語と思想との關係は之を詳細に調

查すれば實に疎漫たるを免れず否疎漫にして而もこれ言語の特質たるなりこゝに於てか教育の必要生じ統一の計畫起るなり

抑も以上の如くにして人為的に生ずる疎雜なる符牒が如何にして一般社會に使用せられ流布せらるゝに到るかは直に起るべき問題なり此に對する答は一言以て之を蔽はば約束の成立にありと云はんミセといふ語は人に商品を見せるといふ語より生じたるなり英語に *show* を以て店に用ゐるたるもまた見せるより起れりさて商品を賣るところなれば賣り場といふとも可なるが如きに何故に見せ棚といふ方にとりて見せと云ひしかを尋ぬるに取て深遠なる理由あるにあらず流るゝ水を流れとし暮るゝよりくれを出したるが如く見せる棚より見世を出して使用し始めたるが衆人連に之を適用し一般之を認定したるが爲見世棚を零して見世といふことも賣り場と云はずして見世といふともなり遂に一定して動かすべからざるに到りたるに外ならず見世棚の見世の方を零して棚と稱して今尙見世の犬なるものを稱することゝなりて棚あるし等といふ語さへ生ずるに到りたるも亦以上の理由ありてなりこれ等二者を比較せば何れも只一の見世棚に原きたるを知るべし此の如く或は分離し或は結合し或は全く變化しつゝも能く世間に使用せらるゝ所以のもの皆是れ此思想に對しては此符牒を用ゐるといふ約束が行はれたるに外ならず實に幾多の言語はこの理由を以て播布せらるゝなり故に一は假令ひ其に對すべき思想に向ては甚不適當なるが如きものなりとも其語の信用弘まりて其使用久しき時は明かに言語中の有力なる部分となることを得人は之に依て亦能く不足なく或思想を再現し得るなり高尚なる思索より起り深遠なる研究の結果より創設したる言語も使用普からざれば遂には單に其學界其社會にのみ存在して普及せざるは何人も知る所なり要之言語は其が根本的價値如何に依らず公衆の認許使用の多寡と使用せらるゝ時日の長短とに依りて勢力を異にす此を以て附會無稽にして怪しむべき語詞も當時の上流人士より出づるか若しくは名けられたる事物が社會上大裨益をなすものゝ如き場合等に於ては著しく速かに傳播せられ因襲せらるゝなり

言語は人類の口を借りて生存し發達し變化するものなるが故に人間相互に之を

言語の生命

使用することなく相傳授することなければ其の生存力は全く消失して遣らず苟も人が之を使用する間は其常態を保ちて存すべし然れども言語は徹頭徹尾變化することなく一定不變のものならざること何人も熟知せるところなり徳川氏時代の言語的記録を取りて之を見よ吾人が思惟すると同等の思想が異なる形式に於て示され古老の説明を経ていよく其差異あることを知るべし室町時代鎌倉時代と漸次溯りて當時の人が談話せし有様を観察せよ果して幾何の類似を見得るか更に一層溯りて古事記の歌謡等を檢するに各語の意義は大に異にして字畫の補助なくんば之を解すること難く其語調語法の如き今日吾人が眞似せんとするも怪しく感ずること多し之を外國語に徴してセーキスピヤの戯曲は今日の英國語を以て律すべからずチヨースの語は遂に學者の手を煩はさずしては解し難きなり支那の古典亦然り當代清朝の語六朝の文進んで尙書等の語法は其間差違を存すること實に莫大なり此の如く今日吾人が容易に了解すべからざる古語も其實現時の言語の祖先にしてかゝる先代の言語が幾多の變遷を経て今日に到りたるものなることを知らば言語の變遷も亦實に多大なるを悟らん言語の生

命といふは即ち此變遷の歴史をいふものにして其出生の時より廢滅に到る間を稱して其生命といふ也これ言語の發生し死滅し發達變化する有様は有機物の發生進化に酷似するものあるを以てホツプ、シライヘル(Schleicher)を初めとして多數の言語學者は言語を以て有機的組織を有するもの、知く思惟し其思量し能はざる玄妙の變化は蓋し之が有機的にして我等の思議すべからざる勢力の在るありて然るによると断定したるより生命あるが如く云ひなしたるに因る近くはマクスマ、エールの如きも言語を見ること聊か此の如くなりしなりされどもこれ固より根本的誤謬にして精確なる批評家は之を許さずダルメステルの如き言語の意義を説明するに用意周密なりし人も亦此が爲に反駁せらるゝところとなれり故に吾等が今こゝに生命と稱する所以は彼等が使用する如き意味に於て云ふにあらず其發達變化を生命と稱する一言をかりて示すに過ぎず

言語に生命あることは言語の本質より考へて明かに然らざるべからざるなり何となれば本來言語は智能を有し社會を形成せる人類に作られ相傳られ使用せられ將た廢棄せらるものなればなり人類の智識は幼時より經驗を積むに從て進歩

(五七)
 ず智識發展するに從て新事實を知る事愈々多く思想を運轉すること蓋し複雑を加ふるを以て其幼時未だ智識の淺薄なりし頃周圍が教授したる不完全なる言語を使用することを肯せず種々自己の意志を加へて語詞を或は變化し或は増加するものなり學術界に身を委ぬる人に於ては此事頗る著しくして其増加する語詞は實に多大なり此の如くにして人類は言語の材料を變化する傾向あるのみならず言語自らの本質は前章に述ぶるが如く甚疎雜なるものなれば各人の相互に言語を交ふる際幾分の誤謬なきを保し難く其發音に到りては更に甚しきものあり實に嚴格に調査するときは社會各人の發音は各々固有の癖あるが爲に相傳の際變化あること些少ならず殊に小兒は言語の變化を起さしむること甚多く其淺薄なる智識と不完全なる模倣とが言語を習得し使用する上に於て大に誤謬いなる差違を生ずる事著し而も社會多數の人類は特に教育の力を借らざる以上は其差違を存したる儘に使用し行くが故に全く匡正せらるゝともなく差違はますます差違を生じ遂に大なる變態を出すに至るなり社會の個人が言語を變化せしむること此の如く大なるを以て此を以て組織せられたる社會の國語の變化することば

固より怪しむに足らず故に言語は小兒に依て誤らるゝと特別なる思想を表彰せん爲に故意に改造せらるゝと其他幾多無意識的使用の結果種々の變化を受くるものなりと云はざるを得ず

以上の如き驚くべき變化が言語上に起る勢力を指して言語の變化力 (alternative force) と稱し其原形原義を保守せんとする一方の力を名けて保守力 (conservative force) と云ふ上に述べたるが如き事情は即ち變化力にして教育文學等によりて其國語を匡正し方言を齊一せんとする力即ち保守力なり此二力は間斷なく言語の上に行はれて言語は種々の變化を受く其變化の種類發達の有様を精細に調査し變化の起るべき動機原因其變化の方法を研究するは即ち言語を歴史的に研究せんとする言語學の本領にして言語學者は時の古今地の彼此を問はず普く言語の材料を蒐集し其間の關係を討究する義務あるものなり

言語變化の種類

前章に述べたる言語の變化に就きて故ハイトニ氏は明断なる分類を擧げれば今こゝに之を採用して左に示さん

第一、古語の變化して今尙思想表彰の爲に使用せらるゝものに就て

一、聲音の様子變化すること

二、意義の變化すること

(此二は各個獨立に起り或は相合併して起る)

第二、古語の消滅して現今は使用せられざるものに就て

一、語詞全く消滅して跡を遺さざること

二、語詞は其形を止むれども其古き文法上の形式及區別消滅すること

第三、新語の發生に就て

一、新語詞若しくは新形發生して舊來の言語の數増加すること

二、思想表彰の方法を増加すること

氏は右の分類法を以て完全なるものとなしあらゆる言語上の變化は總て此内に網羅せらるゝと稱す勿論言語變化を尙詳細に檢すれば多々あるべしと雖も此等の項目中に包含せしむることを得るものなれば吾輩は今これに依りて逐次説明せんとす此内最初に出されたる聲音變化と意義變化とは甚重要なるものなれば先

づ此二者に就て何をか聲音變化といふ何とか意義變化といふ此二者關係は如何にあるかを説明せん

抑も言語には聲音と意義との二要素を有し前者は即ち形式にして外形ともいひ後者は實質にしてまた之を内容といふ而も此二者はもとく相離るべからざる關係を有し外形の差別は内容に差別あることを示し内容の差別は外形の差別をかりて示さるゝこと自然なり然れども實際言語を調査するに外形等しくして内容異なるあり内容等しくして外形同じからざるものなきにあらずこれ即ち同形異義語(Homonym)異形同義語(Synonym)のある所以にして従て外形變化と意義變化とが相伴ふこと、各々別々に行はるゝ事とある所以なり元來言語は社會個人の間で成立する約束より行はるゝものにして各人は其心理活動即ち心意聯關の原則を根本として種々の思想に連れ種々の言語を羅列するものなるが故に或る外形即ち聲音を以て或る思想を表彰することの變化換言すれば外形變化と内容變化とは相伴ふことありと雖も二者互に因果の關係を有するものにあらざるが故に一方が他方の爲に作用を受くるとなく又二者共に同一の原因より來るといふこ

ともなしされども此二者の間には一方の變化が他方の變化をして強からしむることあるは事實なり故に吾輩は此二變化を別々に論究して其原因方法を明かにせんとす此等は次章に到りて見るべし

言語の外形變化の理由

言語の外形變化を叙述する前に當りて其變化の起る理由を説かんとす聲音變化の理由を説明せんとしたるもの言語學の始祖ポツプを初めとして爾來其數多し今こゝに聊か詳かに其方法を説明せん

ポツプ以前言語學者にあらざして言語を好事的に研究したる諸氏は發音に差ある原因は全く風土氣候に種々差異あるが爲自ら發音機關に異なる所あるにありといへり即ち氣候溫暖にして風物清亮なるところの人民は自ら優柔にして醜麗なる美音を發し峻嶮嶮峻に固まれて寒風膚に迫る如き土地の民は自ら稜骨あるが如き發音をなし峻厲なる語氣を帶ふといふにあり蓋し此の説は科學的眼孔なきものが偶々外界の状況と言語の發音とが類似する如く思惟し眞に主觀的妄斷を下して兩者の間に因果的關係を立てんとするに出づ聲音の性質は果して如何なるものなるかに至りては毫も知るところなきが爲のみ科學の開けざる時に當りては此の如き愚説の顯はるゝこと東西一にして實に我國の古國學者の云ひしところと相類するを見る

ポツプ(Popp)は上にも云ひたるか如く言語を以て一の有機體と認めたるが故に従て此に關する立論も亦生物的に歸し去りたり氏より後の人は多く話者が勞力節減の爲に發音に變化を生ぜしむるなりと云へりこれ即ち便宜説といふべき者にしてクルチウス(Curtius)の如き大に之を唱導し其著 Grundzüge der griechischen Etymologie 二十三頁に「便宜は何れの場合も聲音韻に變化を生ぜしむる重要な原則なり」といひ強音が弱音に轉ずる事を得るは自然なれども弱音が強音に變ずること決してなきは蓋しこれに起因すと説けりアスコリ(Ascoli) ベンソナイ(Benley)は之を反駁するに實證を以てしクルチウスが云ふ如き音韻變化に従はざるものある以上は此原則は未だ充分盡したりと云ひ難しとせり吾人を以て見ればクルチウス氏の云ふところは全然不可なるにあらざと雖この場合に於て便宜を説けるは體に其所を誤りたるものといはざるを得ずホイットニー氏の如き稍々クルチウス

のに類似せるものありと雖其所論は實驗的にして確實なり而もクルチウス等が若眼未だ到らざりし心理的作用を認めて外形變化の上にも亦その影響あることを説明せりオストホフ(Osthoff)はクルチウスの便宜説に反對して風土説を主張しホツア以前の古人が妄想したりしが如く等しく聲音の差異を以て發音機官の差異に比例すと斷言し更に進んで發音機官の容形は主として其國土の氣候及び教育文化の程度に關するものなりと云へり如何にも氣候が發音機官に幾分の影響を及ぼすことは他の身軀機官に於けるが如く或關係に於て概ね許容し得るところありと雖生理學は未だ此を證明したることなく又歴史的に變化し來れる音の變化若しくは一國內に諸種の方言的差異あるは發音機官が其容形を變ずるに依るといふ證明を與へられたることもしなければ未だ此説を甘受すること能はず氏は同一族の人民も地を轉じて移住するとき各其風土に従て聲音を變化すとて其證を挙げたれどもこれ其の風土氣候が然らしむるにあらざるなり移住して年月を経過する間に其土地在來の人民が使用する語言より傳染し來りて移住者の聲音に變化を起したるのみ氏の如きは實に言語が人間に依りて傳へられ人間に

よりて生存するものなることを知らざるものにして笑ふべきの至りなり若し氏の云ふところの如くんば日本人が亞弗利加沙漠の近邊に獨移住しても自ら聲音の變化起らざるを得ず此の如きは永劫を經ともあるべからざる事なりこゝを以て余輩は氏の妄斷を排し去るに憚らざるなりさて然らば何を以て聲音變化の理由となすべきかこゝに攻究せざるべからずこゝは復た須臾らく言語の本質より説き起して之に及ばざるを得ず抑も上に述べたるが如く人間か交通社會に存する以上は其使用する言語も常に自發的のみにて終るものにあらずして受動的の地位にも立つべき事一生免るべからざる事なれば幼時他人の言語を聞きて之を模倣する間より既に自己流の發音と模倣したるものとの相雜へ愈々長ずるに及んで漸く模倣のみに依ることなき時代に達しても尙發音の模倣と無意識に自發する聲音とは相交りて止む事なし社會の各人此の如くにして其社會の國語に變態を生ぜしむこれを差別的作用といふ(Individualisierung)差別的作用の行はるゝといふも凡て無意識的作用なるが故に各人は自らこれを感じせざるなり人は此の如くにして數年前話したると同等にして更に些

の差違もなき様に話すことなきに係はらず自己は同等なりと心得て一生を經過す翻て熟々其行跡を検するを得ば實に大なる言語變化の歴史を遺せしを知らんオストホフ氏は好比喻を以て之を説明せり今左に之を示さん

「語形の採用せられ若しくは破壊し去らるゝ狀況は實に貨幣に酷似せる所あり貿易商用等の間には其授受する貨幣の印章が正なりや贋なりや何人も之を顧みずして使用せり多少其印章の摩滅せるところありとも其貨幣の通用せらるべき價値は更に損せらるゝことなきが故ならん言語も亦此の如きものあり日々吾人が使用する言語の上に音韻の不完全なるものあるか其使用の方法宜しきを得たるかは何人も更に注意することなし文法家と稱するものはこれ恰も貨幣に對する印章鑑査官の如き者なり文法家は言語を検して形式通りの印章を有せるや否やを鑑別し之を摘出することを得と雖印章鑑査官たらざる普通言語使用者は遂に何等をも知らずして過ぐるなり」

右の比喩は明かに言語使用の實況を説明せるものにして吾人が外形變化に心付かずして言語を使用せること誠此の如きなり

此差別的作用の起る原因はホイトニー氏等の所説に従へば特に用意して起す變化の外怠慢(Careless)と努力節約とに因るとす即人の自然的傾向として其結果を収むる上に大なる利益なくとも障碍損耗なき以上は成るべく自己の努力を節減して發音の簡約なる方に従ひ形式の複雑なる方に向ふとを避るが爲に自然困難なる發音を有する語は容易なるものに變ずると言語使用の際不注意に且怠慢にして言語外形上の細密なる差別の如きは之を等閑視して顧みざるが爲自然言語の外形が削減せられ若しくは變化するなりといふものなり其他特に感情に訴ふる等特殊の場合なきにあらずと雖普通に原因と認め得べきものは以上の二なりとすハウル氏は此説に反對して此差別的作用は根本的全く聲音器官の運動感覺の變化に徴することを得と斷言し便宜に従て聲音を變ずる事は寧ろ第二次的の主因とするを至當となすといへり而もハウル氏は音韻變化が何故彼に向はずして必ず此に向ふ如き傾向をなすやの理由を解するに當りては人が便宜を求めんとする傾向を有するに依ると斷定せり要之ハウルは言語變化の現象は悉く其根本を心理的機能に發したる者として論じ只其表面の現象をのみ捕へて立論すること

を好まざるが故にかく云ふのみ最公平なる眼孔を以て彼此の説を比較すれば蓋し其思考の淺深に於て差あるに過ぎず若しそれ兩者が其原由を解説するに用ゐる語を見れば實に同様なるを知らんハッセル氏は方今獨逸に起れる新文法學派(新文法學派)に屬し常に鋭敏なる穿鑿を試み研究の方針を深く心理的方面に向くを以て其所説は言語の哲學的方面に走ること多し故に氏が言語の根本的研究の結果は屢々言語學の上に與へられ強固なる地位を保てり予輩は氏の説とデルブリュック氏の説とを調和して此原由を説き終らんとすデルブリュック氏曰く各個人は自ら聞取りたる音と全く同等なる音を發するものにあらずして常に之を自流に化せしめんとすそのこれをなす所以は便宜を好むに依るか將た圓滑流暢に表彰せんとする美的思想に刺戟せらるゝに依るか將た又其耳が音を正確に聞き取らんと力むる間にも而も充分明晰緻密に之を捕捉すること能はざるか爲之を發音する上に於ても不完全の儘を模倣して口に出すに依るか若しくは或他の原因に依るものなりとこゝに云へるところの音を聞き取るとはハッセル氏等の説の如く只他人の音を聞くのみならず自己の發音をも聞取るをいふさてかくして

聞取る間に於て音を不完全の儘に聞取るか若しくは正當に聞取るとも之を出すに於て自ら便宜を好む習慣或は己か交通せる社會に對して受取られ易からしめんとする意志が無意識的に活動するに至る等のために以前と同等に發音せらるゝことなしかく聞取る上と發音する上とに於て差異あるが爲所謂差別的勢力成立す然れども各箇人の差別的勢力も社會の間にありては一般言語の風習を一樣にせんとする傾向即ち交際上相互に了解し易き様に表彰せんとする傾向の爲に妨害せらるゝが故に言語は非常に迅速に甚しく多大に變化することなし殊に其言語を交る社會の人數少なきときに於ては此平均作用著しきものなりかゝればこそ各人は其言語に變遷あることを悟らざるなれされども畢竟言語が變遷をなす根本的の原由は差別作用によることは至要なる條件たり之を要するに差別作用にて言語上に差別を起し平均作用にて差別をして一定せしむるものなるが故に一社會の言語の一樣になるといふことは全く平均作用の力にして一時代の語が前時代より異なるといふも一社會の言語が他社會の語より異なるといふも共に差別作用の力なり而して尙其原因を尋求すれば前述の如く箇人の言語の無意

論的變化が差別作用をなし、交通が平均作用をなす基となるものなり、故に社會の交通止むときは、平均作用は其均勢を保つこと能はずして其働を止む、社會の交通止み平均作用止みたるときは、言語は分裂して種々の語法となるものにして、此間種々の困難を受けてこゝに大變調を來すなり、實に此間に於ける地理上の限界と年時上の長短とは、言語の上に大變化を與ふるものなり、既に以上の事項を以て、言語の形態變化の原因なりと定むるときは、左の如く斷言することを得べし、

第一、同じ方言若くは同國語中にては、音韻變化は不定律なることなく、又永久動搖することなし、但し上述の如く平均力と差別力とが互に相闘ふ間は、言語の形態上に動搖あるべしと雖、通常歴史的の變遷をなす上に於ては、交通常に絶えざる爲、即ち使用止まざる爲に、平均作用は大に差別作用を壓する傾向を有するが故に、音韻の變化は一定律に従ふものなり、

第二、凡て音韻の變化は、無意識的に働く運動感覺を基となすが故に、其運動

感覺の事實に一定の規則ある以上は、音韻の變化も亦一定の規則に依りて起り、平均作用の爲に常に一定なることを得るものなり、

此の如く形態の變化は規則的なるものなりと斷定することは、これ演繹的の證論によるものなれば、實際上形態の變化を檢察するときは、蓋し音韻法則といふべき一定律に入るべからざるものあるべし、然りと雖、其等は凡て所謂音韻法則以外のものに外ならざれば、古來不規則的變化と稱するものは、實は音韻法則を以て論ずることを得ざる全く別物なりとす、即ち言語の形態變化の事實中には、音韻法則と及び或他の現象ありと云はざるべからず、以下其他のものに就きて論ぜんとするに先ち、抑も其音韻法則とは如何なるものか、之を定律とする所以の理由は何處にあるかを決定せざるべからず、これ即ち吾人が次章に於て云はんところなり、

音韻の變化を論ず

音韻の變化を論ぜんとするは、音韻學が大に勉むべきことなりと雖、之を詳論せんとするときは、生理的事項より發足して、數多のことを述べざるべからざるが故に、

音韻の事に關する研究は、別に一科の學として講究する價值あるものとなし、近代之を聲音學(Phonetic)と稱して別立するに至りたり、今こゝに聲音學の範圍内に立入りて之を述べんとするは、寧ろ煩を増すの嫌あれば、予輩は音韻變化の法則に關係ある限りの事項に就きて之を叙述せんとす、

一、發音機官の構造

人類の發音機官として重要な部分には左の如し、

第一 呼吸機、横隔膜、肺臟及び氣管

發聲部 喉頭

第二 調節機、

調音部 喉頭より上部に位する空間

第一呼吸機は何人も知る如く、前記の三を以て要用なるものとなす、而して吾人の發音をなすに必要な空氣は、肺臟より氣管を傳ひて吐出せらるゝものにして、其吐出の爲に肺臟の收縮するとき横隔膜は其力を助くるものなることも、こゝに殊に叙述するを要せざるべし、故に呼吸機に關しては別に云ふところあらざらんとす、只吾人の言辭に用ゐる空氣は呼吸氣息中の呼吸によるものにして、吸氣によら

ざることは注意すべきことなり、尤も世界の廣き、或土地の人は吸氣を以て或音を發すといふ事實は、已に専門學者の承認せるところなりと雖、概して之を云ふときは呼吸に限れりとして妨げなきなり、

第二調節機は即ち前述の空氣が遮られて聲音を生ずる爲に必要な機管なれば其構造に就きて聊か精しく記述せざるを得ず、これは何人も見得る部分と、或特種の機械を用ゐざれば見ること能はざる部分とあるを以て、こゝに圖を掲げて説明すれば明瞭に了得せしむることを得べしと雖、圖は精細を要し紙幅の許さざるどころもあるを以て、遺憾ながら單に記述に止めん、

先づ第一發聲部の構造より説き起さんとするに當り、氣管の上末端より之を描記せん、元來氣管は○形(此合ざる部分は後に向へり)の軟骨を積み重ねて筒の如くなれるものにして、此氣管の最上部に位する軟骨に環狀軟骨と稱するものあり、其形認印(カウチ)を背に有する指環の如くにして、其幅厚き方後に向けり、此軟骨の上に通常のどぼどけと稱する軟骨あり、學名を甲狀軟骨(又楯狀軟骨)と云ふ、二枚折の屏風を折り立てたる如きものにして、吾人が指を觸れて硬く感ずるところは即ち其折目と

もいふべきところなり、左右共に四角形をなし、兩翼後に向ひて開き、環狀軟骨の側面平らなるところを狭む如くに位せり、兩翼の後の上の隅に角の如きものありて、舌骨に接す、此甲状軟骨と環狀軟骨とを以て圍まれたる内面は、粘膜を以て蔽はれ、一條の管を形造り、只其後の方に少しのあきめあり、環狀軟骨の上方後部に小さき三角形の軟骨二枚あり、左右相向ひて存す、其形ち楔の如くなるを以て楔狀軟骨といひ、或はピラミッド形なるを以て其儘之をピラミッド形軟骨といひ、或は醫學の名に従ひて披裂軟骨といふ、此軟骨の底面即ちピラミッドの底面に當るところより管内に向ひて出づるものを聲帶突起といふ、聲帶突起より後より前に向ひて管を横ざり、互れる筋帶あり、これは粘膜を以て包まれ、前端は甲状軟骨の内面に終り、兩側は管の粘膜に連続せり、こゝを以て其形決して帯の如くならず、されども從來普通に之を聲帶と稱す、聲帶は楔狀軟骨の運動によりて左右二帶或は相近づき或は相遠ざかることを得、又聲帶に具はれる筋肉の作用によりて巧みに伸縮することを得、此の如くして二帶の造る間隙を聲門と稱す、此聲門の前部を筋聲門又は本聲門といひ、後部即ち兩楔狀軟骨を以てなす間隙を軟骨聲門又は呼吸門といふ、此本聲門

は發音に必要なるところにして自由に開閉することを得れども、呼吸門は密閉せらるることなし、聲門の上部に至れば左右兩側に於て少しく管の凹めるところあり、これは以太利の生理學者モルガニイ氏の發見に係るを以てモルガニイ管といふ、モルガニイ管を出で、上に向へばこれ又聲帶の如くにして其縁の圓み聲帶より厚きものあり、これは特別の筋肉をも具有せざるが故に何等の用をもなさない、ども、聲帶に類似せるを以て假聲帶といふ、從て前者を真聲帶と稱す、假聲帶を以て成れる間隙は廣くして用なき故、これも亦假聲門として真聲門に對す、尙これより上部舌の背部に位して、飲食物の呼吸管に向ふことを妨ぐる瓣あり、これは平扁なる軟骨にして、筋肉を有し、俯するときは喉頭の門を蔽ふことを得、之を會厭軟骨といふ、環狀軟骨等よりこの會厭軟骨に至るまでは、即ち喉頭と稱する部分なり、次に調音部といふは、全く發音の上に付屬したる空腔を云ふものにして、此主なるものを擧ぐれば、鼻腔と口腔となり、即ちこれらは喉頭腔(會厭軟骨と聲帶との間の空腔)の上にある咽腔より出で、前方上部に位し、其全部若しくは一部の作用は發音に影響を與ふること甚だ大なり、口腔とは動き得る下顎と動くことを得ざる上

顎とより成れる空腔を稱するものにして、其上顎を前方より尋ね行けば先づ第一に知るものは唇にして次は上齒なり、上齒より少しく進めば突起せるところあるを知らん、これ齒槽突起にしてこれより彎形の硬き部分を認む之を硬口蓋と稱す、硬口蓋を盡せば直ちに柔軟なる部分に至らんこれ即ち軟口蓋と稱するところに於て、これは口を最も廣く開き舌を口外に延し出すときは其全部を見ることを得、軟口蓋より後に當りて奥に弓形の筋肉ありて口腔を境せるものあり、これを口蓋弓といふ、其下方は咽頭、咽頭とは喉頭腔と咽腔とを總稱したる名なり、これに連れり、此口蓋弓の門を通じて奥に見ゆる肉壁を咽頭壁といふ、咽頭壁と口蓋弓との中程に又一の弓形筋肉あり、其彎曲の度は口蓋弓より強けれども同様の形をなせるを以てこれも亦口蓋弓と稱す、前に云へる口蓋弓は咽頭に接けるを以て咽頭口蓋弓といひ、今いへるものは後口蓋弓と稱して之を區別す、此二口蓋弓の間に扁桃腺と稱するものあり、咽頭を病む人が醫療を受くるとき切らるゝものはこれなり、前口蓋弓の中央部に當りて氷柱狀の筋肉の垂下せるものあり、之を懸壺垂といふ、これ亦何人と雖口を開きて鏡に向へば能く見るとを得るものなり、口蓋弓の運動は單純にして前方舌背にまで突き出すことも後方には咽頭壁に押し付くることも得、即ち口蓋弓前に來るときは、咽腔と口腔とを隔て喉頭より來る空氣をして鼻に通はしむ、口の喉音を發するときはこの状態にあるものなり、口蓋弓後方に引き付けらるゝときは、咽腔と鼻腔とを隔て内より來る空氣をして口腔に通はしむ、これ吾人が飲食物を嚥下するとき又は鼻音を帯びざる音母音を發するときの状態なり、吾人が靜かに呼吸をなすとき鼻音を帯べる音を發するとき、口蓋弓は舌背と咽頭壁との間に游離してかゝり、口腔と鼻腔とを相通せしむ、さて次に下顎を前方より次第に後に向ひて尋ね行けば、唇の次に齒列あり、其次に指頭に觸るゝものは舌尖なり、舌は無職の人が想ふ如く一薄片にあらずして數多の筋の集合して成れる肉團なり、之を延せば咽にまで舌尖を出す迄に至ると雖、之を縮め口を閉づる時は口腔を滿すに足るものなり、其後部は咽に向ひて曲り會厭軟骨のところに至る試みに指頭を以て舌背を摩し漸次進めて奥に入らば指の會厭軟骨に觸るゝを知るべし、舌を組成する筋及び其運動に重要な筋の如きは、一々爰に詳説することを避くべし、唇の構造に至りては更に説明を加ふるを要せざれども、其運動を注意する

にして前方舌背にまで突き出すことも後方には咽頭壁に押し付くることも得、即ち口蓋弓前に來るときは、咽腔と口腔とを隔て喉頭より來る空氣をして鼻に通はしむ、口の喉音を發するときはこの状態にあるものなり、口蓋弓後方に引き付けらるゝときは、咽腔と鼻腔とを隔て内より來る空氣をして口腔に通はしむ、これ吾人が飲食物を嚥下するとき又は鼻音を帯びざる音母音を發するときの状態なり、吾人が靜かに呼吸をなすとき鼻音を帯べる音を發するとき、口蓋弓は舌背と咽頭壁との間に游離してかゝり、口腔と鼻腔とを相通せしむ、さて次に下顎を前方より次第に後に向ひて尋ね行けば、唇の次に齒列あり、其次に指頭に觸るゝものは舌尖なり、舌は無職の人が想ふ如く一薄片にあらずして數多の筋の集合して成れる肉團なり、之を延せば咽にまで舌尖を出す迄に至ると雖、之を縮め口を閉づる時は口腔を滿すに足るものなり、其後部は咽に向ひて曲り會厭軟骨のところに至る試みに指頭を以て舌背を摩し漸次進めて奥に入らば指の會厭軟骨に觸るゝを知るべし、舌を組成する筋及び其運動に重要な筋の如きは、一々爰に詳説することを避くべし、唇の構造に至りては更に説明を加ふるを要せざれども、其運動を注意する

こと甚だ必要なればこゝに之を説かん、抑も唇が自ら動く有様に左の三あり、

一、上下兩唇の終るところを水平に後に引くこと、これ即ちイといふ音を發するときの形なり、

二、口孔を或は圓く或は卵形等に圓くすること、これウ、オ等の音を出す場合の如きものなり、

三、唇を前に突き出すこと、これウ、オ、シ、ス等の音を出すとき、の如き形なり、但し唇を突出するときには多少圓くする氣味あるものなり、ウ、オ等の音を發するとき、自ら鏡に向ひて之を檢すれば明かなり、

尙右の外唇の形につきて詳細の區別あり、又其變形の度に於ても種々ありと雖、一々茲に之を説かず、次に鼻腔は二の通溝より成りて常に外氣に通じ、外氣と鼻腔とを隔つるものなし、只前に述べたるが如く軟口蓋の運動に依りて口腔との通路を遮斷することあるのみ、これまた其詳細なる構造を説くべき要なければ之を除けり、

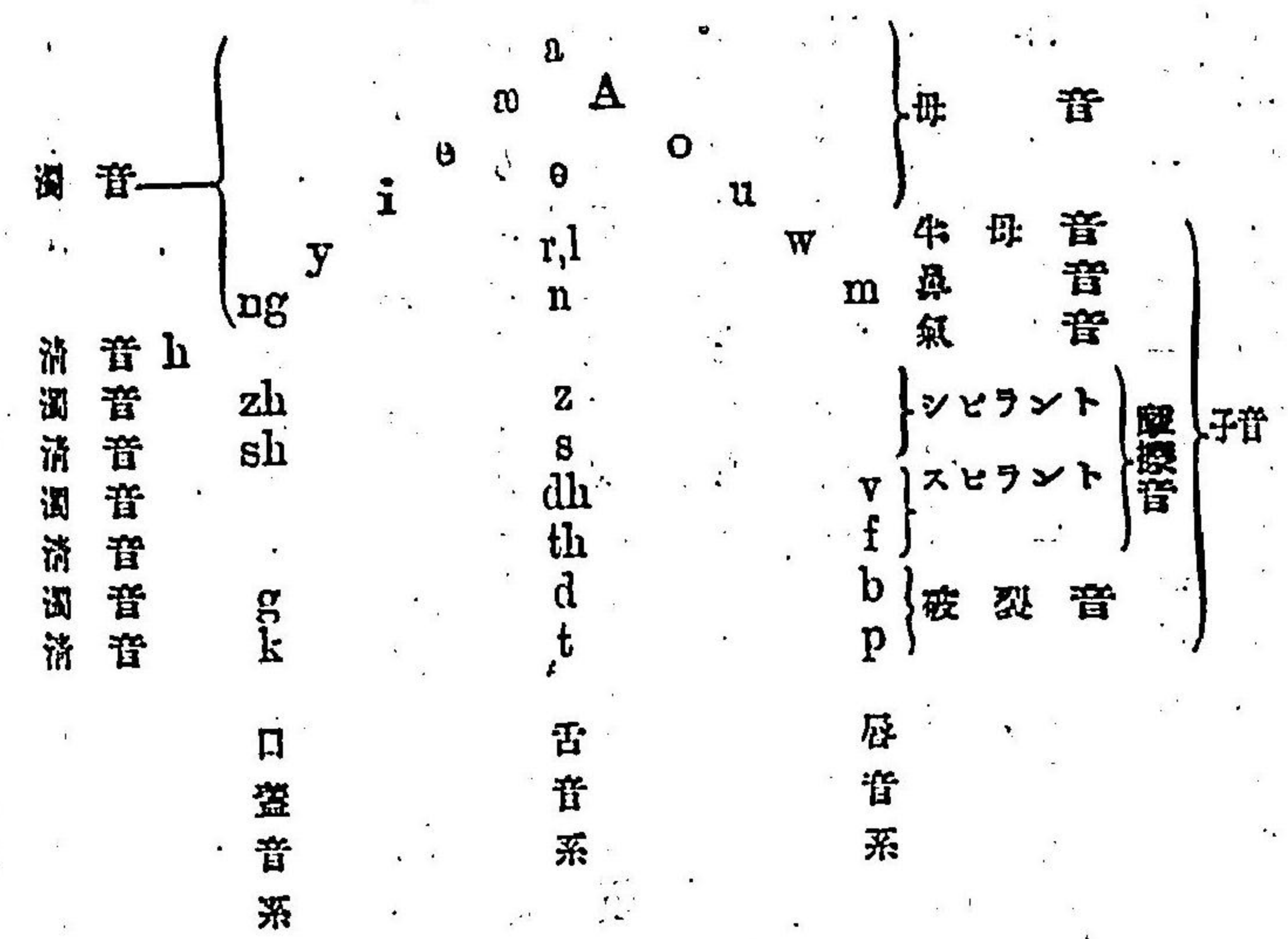
以上の事を概括すれば、調音部は即ち鼻腔口腔喉腔の三の主要なる空腔より成立

し、口腔と鼻腔とを隔つる爲には軟口蓋の全部あり、喉腔と咽腔との間には會厭軟骨ありて兩者の通路を塞ぐことを得、口腔と外氣と相隔つることを得る爲に唇あり、

二、主なる音韻の發生する有様

前章に於て發音機官の構造を比較的詳細に記述したれば、次には其各部の作用を詳説し、一方に於て所謂一般音響の性質及び其原則を討究して之を示し、吾人の辨音が發生する状況を述ぶるは自然の順序なりと雖、此等を一々説明するとき、遂に聲音學の全部を紹介せざるを得ざるに至り、限りある此書を以ては其目的を充す能はざることあるべければ、これより直ちに主なる音韻が如何にして發生せらるゝかを陳べんとす、又各音を論ずるに於ても其分類法種々ある上、音の發生につきて詳細なることを叙述するときは、専門の一科の如くなる爲、讀者の煩勞を増すこと多ければ、こゝにはホイトニ一氏の簡便にして明瞭なる圖を掲げ、これにつきて一々説明を加へんとす、この圖はホイトニ一氏が英語につきて示したるものなるを以て、英語にありて日本語になき音を存し、日本語にありて英語になき音を缺く

と雖、大略に於て大差なきを以てこれを用ゐたり、



5. 清音と濁音との區別

清音濁音といふ名稱は支那に於て已に之を用ゐたるものにして、日本に於ても古來之を傳へて韻學に用ゐることゝなれり、されども此は耳に聞きたる上より命名したるものなるが故に、音の性質を顯はす名としては甚妥當ならず、殊に此名に拘泥して清音とはすみたる音なり濁音とは濁りたる音なりと解し去りて終ること多く、明かに我が國學の大家すら之を根本として種々音韻上の僻説を出したることも夥しくありし程なれば、宜しく採用せざるに如かず、然れども世人が既に熟知せる名稱なれば強ち新奇の熟字を造出するにも及ばざれば、今は此名稱を採用して其意義の解釋を殊にせんとす、抑も清音とは之を發するとき、肺臟より出来る空氣が聲門を通過するとき、何等の障礙を受けず、口腔内に來りて初めて軟口蓋、舌若しくは唇に當りて其の支障を受けて、各別なる音を發するものなり、語を換へて云はば、聲帶の振動なく、調音部の或ものに空氣が當りて發する音なり、即ち圖中上、p, th, f, s, sh の音これなり、但し h は前述の場合よりも聊か聲門の有様變るが爲、こゝに些少の摩擦を受けて發するものなれば、他の清音とは少しく異なるどころあり、

り、されども所謂濁音の場合の如く聲帯は充分なる振動をなすにあらざ、濁音とは聲帯相近きて聲門の間隙を空氣が通過する際、其氣勢の爲に振動して音を發しなから、口腔内に空氣通じて支障を受くる爲に成る音なり、即ち圖中 g d b dh v zh z の音及び母音半母音鼻音と稱するものこれなり、これ等が發音せらるゝ時は皆聲帯の振動起るが故なり、此の如く清音と濁音との區別は全く聲帯の振動の有無に本づくものなれば、學者自ら指頭を甲状軟骨の上部に觸れつゝ兩者を發音すれば、清濁音の本意義は明かに知ることを得べし、故に吾人が正當なる命名を求むれば、清音を以て無韻音とし濁音を以て有韻音となすべきか、尙後日定むるところあらんとす、

ろ、母音子音半母音鼻音等のこと

母音子音も亦古くより用ゐる來れる語なるが、此名稱を否定して父音母音と稱するもの亦趣からず、母音子音といふもとより母子の關係あるにあらざれば之を否定すること非なるにあらざと雖、父音母音と稱して熟音ソラナを子音と稱するに至りては吾人の首肯し能はざるところなり、何となれば父音母音と稱すること可なりとす

ども、熟音は彼等と親子の如き關係あることなく、實際上一音と雖亦能く一熟音を成すことあるものなれば、熟音を稱して子音と云ふに至りては甚不可なり、故に吾人は不當なりとは熟知すれども、猶古くより使用し來れる母音子音の名を用ゐて、清濁音に於けるが如く、其意義を解釋する上に於て異なる所あらしめんとす、母音とは肺臟より出で來る空氣が閉鎖せる聲門を破りて聲帯に振動を與へ、進んで口腔に入り、顎角(上顎と下顎とより成る角度の度、舌の状態、唇の有様によりて、種々の音をなすものを云ふ、ア(a)は口腔と咽喉とを廣く開きて空氣の流出を妨げずして發生するものなり、イ(i)は口蓋に舌の扁平面を近くる時、この時の唇の形は前出の如しに發するものなり、ウ(u)は舌を常態におき唇を圓形になして發する音なり、此ア、イ、ウの三音は母音中主要なるものにして、色にて云はば青黄赤の三正色と云ふが如きものなり、圖に就て之を見よ、アイウの三を以て三角形を成し、頂點にアありて底邊に當る兩端にイウあり、而してイは左にありてウは右にあり、これ即ちイは口蓋に關する音にしてウは唇に關する音なればなり、尙アとイとの間にはエとエ(ê)あるを見ん、先づ口を開きてアを發音し其韻を保ちながら次第に顎角を少

くし舌を口蓋に近寄するときは、*o*に次で*e*を發することを知らん、即ち*e*は*i*の時より顎角廣く*a*の時より狭く舌と口蓋との間*a*の時より近く*i*の時より遠きなり、*o*も同理にして*a*と*e*との間にあり此音は米國人の *man, cat* 等いふときの *a*の音なり、我國の文字にして相當すべきものなしと雖、口語を用ゐる間には存するものなり、次に*a*と*u*との間には*A*と*o*(*o*)とあるを見ん、これ亦*a*を發音して其韻を保ちながら次第に兩唇を圓くする氣味を以て*u*に近かんとするときは、*A*に次で*o*を發すべし、即ち*a*は*u*の時より唇の開き方多く*a*の時より少し、*A*は之に反して*o*の時より唇の開き方多く*a*の時より狭きなり、英語 *mount* の *a* の音これなり、これは本邦にあると*o*に就て云へると同然なり、三角形底邊に當るところ中央に*e*を倒置したる印あり、これは*i*と*u*との間の音なるが故にこゝに置きたるにあらざ、唇の有様舌の位置顎角の度に於て他と異なる一種の音にして、*a*に類して少しく氣息の籠るが如き音なるを以て*a*の直下におきたるのみ、さて此三角形をなせる八箇の音は所謂母音を總括して餘すところなきかと思はれ、其然らざるを答へざるべからず、此三角形の邊上には尙幾多の音ありて彼此の中間に位せしむべし。

きものあること勿論なり、彼の北陸の方言に有せる *o* にもおらざいにもおらざる音の如きは實に其一例にしてこれ蓋し *e* と *i* との中間におくべきものなるべし、尙其他外國の諸語を調査せば夥多なるべし、半母音とは母音と子音との中間にあるものなりとの意を以てかく名けたるものなり、此圖に於ても母音と子音との間にをきたり、*y* 日本五十韻圖 *ヤ* 行の音は *i* よりは口腔内に於て舌面の口蓋に近く趣異にして、*v* (*ウ* 行の音は *u* よりは唇の關するところ多し、即ち共に *i* の如く純然たる母音的性質にあらざ、*y* 若しくは *u* が他の母音と相合する其際に成るものにして、*タチアヒ* (*tschihhi*) といふとき *タチヤ* (*tschiyai*) となり、*タクアン* (*takuan*) といふとき *タクワン* (*takwuan*) となるが如し、故に之を半母音とするなり、尙こゝに *o* と *i* とあり、これも多くの國語に半母音として用ゐらるゝものにして、英語の *aglio* といふとき *i* の如きこれなり、次に鼻音を示せるところの横列 *ng* 及び *m* は硬口蓋の後部上りて咽頭壁に接する事なく依然として存する爲に空氣鼻孔と通するより、出る音なり、*ng* は上海と云ふときの *ン*、*ン* にして、我邦の現今といふとき *ン*、*ン* も亦これなり、舌の後部

(八二)

くし舌を口蓋に近寄するときは、*o*に次で*e*を發することを知らん、即ち*e*は*i*の時より顎角廣く*a*の時より狭く舌と口蓋との間*a*の時より近く*i*の時より遠きなり、*o*も同理にして*a*と*e*との間にあり此音は米國人の *man, cat* 等いふときの *a*の音なり、我國の文字にして相當すべきものなしと雖、口語を用ゐる間には存するものなり、次に*a*と*u*との間には*a*と*o*(*o*)とあるを見ん、これ亦*a*を發音して其韻を保ちながら次第に兩唇を圓くする氣味を以て*u*に近かんとするときは、*a*に次で*o*を發すべし、即ち*o*は*u*の時より唇の開き方多く*a*の時より少し、*a*は之に反して*o*の時より唇の開き方多く*a*の時より狭きなり、英語 *what* の *a* の音これなり、これは本邦にあると*o*に就て云へると同然なり、三角形底邊に當るところ中央に*o*を倒置したる印ありこれは*i*と*u*との間の音なるが故にこゝにoと記したるにあらざ、唇の有様舌の位置顎角の度に於て他と異なる一種の音にして、*a*に類して少しく氣息の籠るが如き音なるを以て*a*の直下におきたるのみ、さて此三角形をなせる八箇の音は所謂母音を總括して餘すところなきかど問はれ其然らざるを答へざるべからず、此三角形の邊上には尙幾多の音ありて彼此の中間に位せしむべし

きものあること勿論なり、彼の北陸の方言に有せる、*e*にもあらざ*i*にもあらざる音の如きは實に其一例にして、これ蓋し*e*と*i*との中間におくべきものなるべし、尙其他外國の諸語を調査せば夥多なるべし、半母音とは母音と子音との中間にあるものなりとの意を以てかく名けたるものなり、此圖に於ても母音と子音との間をきたり、*y*日本五十韻圖ヤ行の音は*i*よりは口腔内に於て舌面の口蓋に近く趣異にして、*w*(*a*行の音)は*u*よりは唇の關するところ多し、即ち共に*i*の如く純然たる母音的性質にあらず、*i*若しくは*u*が他の母音と相合する其際に成るものにして、*tschi*アヒ (*tschihhi*)といふとき、*tschi*ヤ (*tschihyan*)となり、*tschi*アン (*tschiuan*)といふとき、*tschi*ワン (*tschiuan*)となるが如し故に之を半母音とするなり、尙こゝに*r*と*l*とあり、これも多くの國語に半母音として用ゐらるゝものにして、英語の *regret* といふときの *r*の如きこれなり、次に鼻音を示せるところの横列 *ng* *n* 及び *m* は、硬口蓋の後部上りて咽頭壁に接する事なく依然として存する爲に空氣鼻孔と通ずるより、出る音なり、*ng* は上海と云ふときの *シヤンク* にして、我邦の現今といふときの *ケンク* も亦これなり、舌の後部

硬口蓋に觸れて發するものなり、*n*は舌が硬口蓋に當りて發す、普通にはゆる々
 是なり、*m*はムにして先般といふときのセムoのムなり、

*h*は母音半母音又は鼻音を出すときの同じ機官の有様にてありながら、氣息を通
 ずるものにして、この時には聲帯の間隙母韻に發せしむる程に狭ばまらざる爲に、

聲帯は鼓動をなすとなく空氣に通ずる故に、別に聲音を發するに至らず、これが *i*
 の前になれば *h*となり、*h*の前になれば *h*となるなり、依て之は純粹なる出氣の音
 としてこゝにあくものなり、

*z s*は清濁の別あれども、共に舌が硬口蓋に觸接すること緊密ならざるが爲に、こ
 の間を通過する氣息が特殊の振動を受けて發するものなり、これに *h*を付したる

*sh zh*は此 *s z*が口蓋の處にて發せらるゝ者なり、此二様の音を總稱してこゝにシビ
 ラントと稱したり、

*v f*はこれまた清濁の別あれども、兩唇の間を氣息が摩擦して發する音なり、但し
 英佛の語にある *v f*は共に上齒と下唇との間を通じて成る音なれば、具さには之
 を齒唇音と稱すべし、これと同横列にある *th*は舌と齒との間に於て成る音にし

て、前者は英語の *thea*と云ふ時の *th*なり、後者は *think*といふときの *th*なり、これを稱
 して齒舌音といふ、この齒舌音と齒唇音とをスピラントといふ、スピラントとシビ
 ラントとは凡て摩擦の爲に發するが故に摩擦音と稱す、

*k*は舌の後部と軟口蓋とが相密閉せるときに氣息來りて之を破る爲に出で、*t*は
 舌尖と硬口蓋とが密閉せるとき之を破る爲に出で、*p*は兩唇の閉合を破る爲に生
 ずるものなれば、之を總稱して破裂音と稱す、*k t p*の發音と同じ有様にありなが
 ら、之に當る氣息が已に聲帯を鼓動し來りて其音調を持ちて來る爲に成るものを

*g d b*とす、即ち言を換て言は *h k t p*の濁なり、
 これより縦に就て之を検するに、左より第一列のものは總て口蓋の發聲に屬する
 を以て之を口蓋列とし、第二列は舌の作用によるを以て舌列とし、第三列は唇に與
 するを以て唇列とす、

さて此圖を利用して今聲音變化の狀況を研究するに、母音と子音とが同化せる勢
 力の最大なることを知り、併せて其相近似して而も發音に便なるものに變化する
 實狀を知ることを得べし、これ即ち音韻變化の法則の生ずる所以にして、其法則た
 るや甚嚴密にして一定不變なりと云ふとも、敢て過言にあらざるなり、

今こゝに一々其法則を追究して羅列し之を説明せんと欲すれども、項を改めて之
 (八五)

と云は、事順の詳密に趣かざるを得ず、從て豫定の紙敷を以てすること自ら難か
らむ、故に遺憾なりと雖、こゝに筆を擱し、次學年の稿に譲らんとす。

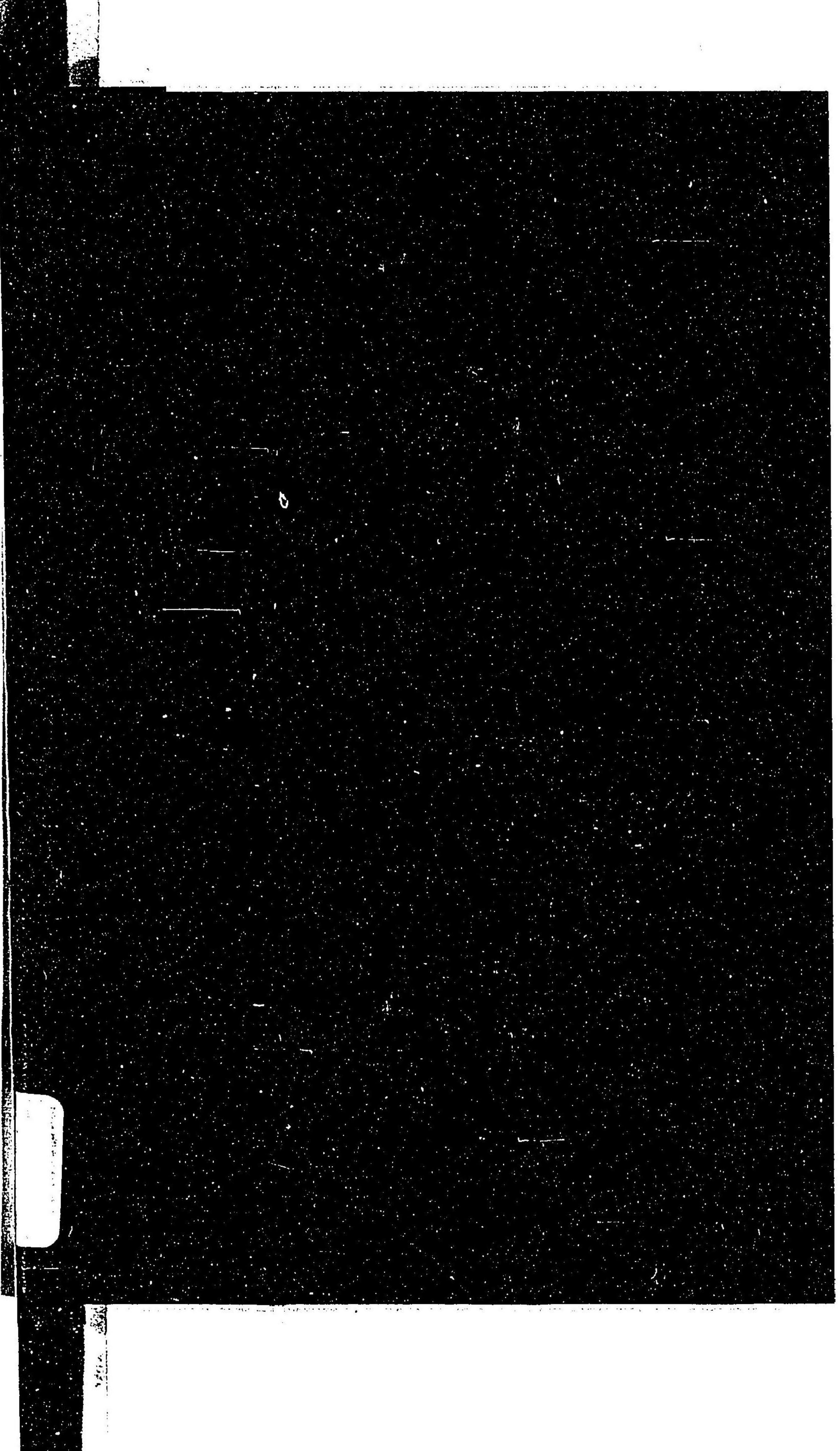
尙音韻變化の規則を説き、追て其例外を説明して、言語の意義變化に及ぼし、言語
の變化に關する一般の攻究を終へ、進んで言語が社會に行はれてより以來其人
種との關係は如何にありしか、又如何にして言語は死滅すべきか、新語の發生は
何を以て始まるか、方言とは如何なる性質のものにして之を統一する策は如何、
言語と教育との關係、言語と歴史との關係、古來言語學が如何に研究せられしか、
日本に於ける言語學の運命は將來果して如何なるべきか、に就き縷々説くべき
義務を有すと雖、由來多事にして屢々寄稿の責を怠り、今日に到りて遂に簡畧に
すら斯學の一斑を示すこと能はざるは自ら悔い自ら悲むところなり、讀者に對
して辭なきを恐るのみ、希くば本篇の甚疎雜にして本題に入らんとして而も
一旦筆を擱かざるを得ざるに至りし事を諒察せられ、次學年更に余輩の説を迎
へられんとす。

磐城中村客舎に於て 藤岡勝二

言語學







Small, illegible text or markings on the left edge of the dark area, possibly a page number or a label.

14

226

哲学館講義録

言語学

国立国会図書館

076610-000-2

14-226

言語学

藤岡 勝二/述

[M33?]

DAA-0019





五丁 48

14
226

北史卷之四十三
高祖本紀第三十三

言法學
一編四卷

